

『枕草子』における地下と下衆

— その表現と存在意義について —

文学部文学科日本文学専攻

稲森 いなもり
一真 かずま

はじめに

随筆文学の先駆けである『枕草子』は、中宮定子の女房、清少納言が書いたとされる作品である。本文には「をかし」をはじめとした美的表現が多く用いられており、それらに当てはまるものが、清少納言の美意識に適った存在であることがわかる。そのような表現は人物に対しても使われており、特に主人である中宮定子や、定子の兄である大納言藤原伊周、父である関白藤原道隆など、定子の周りの人々に対しては「げに千とせもあらまほしき御ありさま」(二二段、五一頁)や「いとものものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾長く引き、所せくて候ひたまふ」(一二四段、二三四頁)など、その美しさについて褒める場面が多くみられる。このことから、『枕草子』は、中宮定子時代の宮中の華やかさを物語っている作品であることがうかがえよう。

その一方で、作中には、地下や下衆と呼ばれる人物が登場する。地下とは、『角川古語大辞典』によると「平安中期以後、内裏や院・東宮の殿上を許されていない人。六位以下の官人」とあり、下衆とは、「身分の低い者。卑しい職業の者」とある。したがって、どちらも身分が低い地位にある人々の呼称である。なぜ『枕草子』は、宮中の華やかさと無縁に見える身分の低い者まで登場させたのだろうか。そして、身分の低い者は、地下と下衆という種類によって、表現に違いがあるのだろうか。本論では『枕草子』における地下と下衆の存在意義と、その扱われ方の差異について考察していきたい。

第一章では、『枕草子』に登場する身分について、平安時代はど

のような役職や位階があり、作中においていかなる形で登場したのか調査する。その中から、平安時代の身分に関する資料を用いて、当時の官職制度に存在した「官人」と言われるべき身分と、官職制度に存在しない、いわゆる下人や庶民といった身分に分けて結果を述べる。本論では、前者を地下、後者を下衆と定義づけて検討する。そして彼らの他作品における扱われ方についても、同時代の作品である『うつほ物語』や『源氏物語』を中心に読み解き、『枕草子』との違いを比較していく。

第二章では、『枕草子』における地下について注目する。本論においては、いずれも清少納言が何らかの形容詞をつけて、その身分の在り方を評し、また登場頻度の高い役職である、隨身、主殿司を取り上げる。まずは、各章段における登場の仕方について調査する。そして、それらの身分が『枕草子』においていかなる役割を果たしていたのか考察する。

第三章では、『枕草子』における下衆について考察する。こちらも地下と同様、作中において清少納言がどのような表現をしたのか調べ、作中における存在意義について考察する。同時に、第二章において調査した地下との違いについても比較していく。また、下衆は、「下衆女」といった、性別を付した表現が多く登場するため、下衆と、下衆女の扱われ方の違いについても考察する。

第一章 平安時代の身分

第一節 平安時代の身分制度―『枕草子』における登場人物を中心に

本節では、平安時代の身分制度について概説する。まずは、身分階層について説明し、『枕草子』中の主要な登場人物の身分について確認する。次に、地下・下衆と呼ばれた人々がどのような役職についていたのか、『枕草子』中に登場する役職を抽出する。

まずは「地下」や「下衆」と呼称された身分が存在した平安時代の身分制度について確認する。当時、公的な身分は、七五七年に制定された養老令が基となっていた^二。養老令の役職は、大別して神祇官、太政官の二官があり、太政官の下に中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大蔵省、宮内省の八省があり、その下に職・寮・司がある^三。したがって、役職を持つ者の多くは、太政官に所属していることとなる。しかし、『枕草子』が成立したとされる平安時代中期には、養老令にはない令外官や、定員を超えて任ぜられた員外官、臨時に任ぜられた権官があった^四。令外官の役職としては、主に摂政、関白、参議、中納言、藏人所などが存在している^四。これほど多くの役職があり、しかも摂政や関白などの重要な地位があったということは、この時代には令外官がすでに必置の役職であったのだろう。

八省に就くためには最低で初位、最高で一位であるいずれかの位階が必要であり、それは給料の基準にもなった^五。特に太政官は、最低でも正七位上より上を必要とした。位階に応じて、それに見

合った役職に任用されることを官位相当制といい、平安時代では位階を授与されてから役職を与えられることが一般的であった^六。ここから読み取るに、位階は、役職よりも重要であったといっても過言ではない。この位階と官職を関連付けさせた表が、官位相当表である。本論ではこちらを、当時採用されていた身分制度として、有効な資料とする。そして位階には、ある基準でまとめられた位階の呼称が三つ存在しており、この中に本論の主題である地下が含まれている。一つ目は公卿といい、太政大臣・摂政・関白、参議および三位以上の「上級官人」の総称である。これ以外に上達部という呼称もある^七。二つ目は殿上人であり、こちらは四位・五位のうち、内裏清涼殿の殿上の間に昇ることを許された者の総称である。こちらも「上人」「雲上人」などと称され^八、場合によっては「上級官人」に含まれる。また例外で、六位藏人も昇殿を許されていた^九ので、本論ではこちらも併せて殿上人とする。上級官人であった公卿や殿上人は、どのような人物が登場するのだろうか。「官位相当表」から読み取り、その結果を以下に記す。ここでは、作品の主要登場人物となった中宮定子と一条天皇の身内、それ以外の公卿と殿上人という三つのグループに分けて調査した。ただし、官職は『枕草子』中において登場したものを採用しており、その人物の最終的な官職を引いていないことに留意されたい。

一条天皇、中宮定子の身内（三等身以内。家系図は『王朝文学文化歴史大事典』七五二・七五三頁にある「藤原氏系図」を参考とした。）

藤原道隆（三位の中將↓太政大臣、摂政、関白、従一位）、藤原道長（中宮職大夫↓左大臣、従二位）、藤原伊周（大納言↓内大臣、従二位）、藤原隆家（中納言、従三位）、藤原兼家（右大臣、従二位）、藤原道兼（右大臣、従二位）、藤原道頼（大納言、正三位）

公卿（一条天皇、中宮定子の身内以外）

源雅信（左大臣、従二位）、藤原公任（参議↓中納言、従三位）、藤原济時（大納言、正三位）、藤原義懐（権中納言、従三位）、藤原為光（大納言、正三位）、藤原齐信（藏人頭・近衛の中將、参議、正四位）、藤原実成（参議、正四位）

以上の結果から、中宮定子の身内は、全員が最終的には三位以上つまり公卿であることが判明した。役職も、太政官の上級クラスである大臣が多い。これは、天皇家との結びつきが非常に強かったがために、道隆を中心とした藤原氏が栄えていたことを意味している。同時に、摂関政治によって、大臣をはじめとした強大な行政権を掌握していたことも考えられよう。九九〇年に道隆が摂政、関白となり、さらに定子が一条天皇に入内して以降に三位以上となった

人物が多いことから裏付けられる。それ以外の公卿にもやはり藤原氏が多く、摂関政治の栄華を見て取ることができる。

では、公卿とまでは呼ばれなかったが、殿上人と呼ばれた、四位、五位の人々はどれほど登場したか。

殿上人（四位、五位と六位の藏人）

藤原行成（左大弁、従四位）、源道方（少納言、従五位）、源経房（右近衛中將、正四位）源济政（藏人、六位）、源成信（右近衛中將、従四位）、源宣方（右近衛中將、従四位）、藤原高遠（兵部卿、正四位）、藤原頼親（内藏頭、従五位）、藤原公信（侍従、従五位）

殿上人と呼ばれた人物も、公卿と同じく、藤原氏が多いことは変わらないことがわかる。源济政、藤原頼親を除けば全員がのちに公卿へ昇進していることから、殿上人はほとんど出世の通過点のような存在であったのではないか。これら公卿や殿上人に対する『枕草子』の表現では、「をかし」や「なまめかし」など、褒め言葉が使われており、否定的な表現は見受けられなかった。また、敬語表現も多く、公卿や殿上人の前では、清少納言は己の身分をわきまえており、敬意の対象とすることが推察される。

ここまで、公卿・殿上人について、どのような人物が登場し、どのような身分であったか概観した。しかし、そもそもこのような役職を持っていた人物は、当時の人口全体で見るとほんの一握りであった。平安時代の日本の人口は六百万人ほどであったが、そのうち平安京には数万〜十数万人もの庶民が暮らしていた。この時

点で平安京に暮らしていた人口は全体の0.02パーセントほどである。さらに公卿・殿上人に限定すると、殿上人を六位藏人まで合わせておよそ三十人と定めていたそうである^{二一}。そのように考えると、上級官人は、平安京に暮らしていた人口としては限りなく少ない人数しか選ばれなかったことがわかる。そこで台頭する身分が三つ目の地下であり、こちらは藏人を除く六位以下の「下級官人」と呼ばれる^{二二}。昇殿も許されることはなく、位階の呼称の中では最も低い地位にある。倉本一宏(二〇二二)によると、五位以上の者には位田が与えられ、宮門の出入・病氣・葬礼・刑の執行などにもさまざまな特権があり、家族にも特典が及んだことから、五位以上と六位以下の位階には大きな差があったと考えられている^{二三}。ただし、繁田信一(二〇二三)では、「六位の中でも、正六位上からの身分は、庶民として扱わずに、下級の貴族として扱った。」^{二四}とあった。ここから、当時は六位という位階には、貴族と庶民の二つの階級があったと考えられる。本論では、前者は、あくまで殿上人のような貴族の中にある身分と位置付けて、正六位下から下の身分を地下と定義する。

さて、地下と呼ばれた人物は、『枕草子』にどれほど登場するか確認したい。以下、藏人除く正六位下以下の役職が登場した箇所を抽出する。地下身分か否かの判断基準に関しては、頭注と、『国史大辞典』、『角川古語大辞典』、『王朝文学文化歴史大事典』の「官位相当表」にあった情報を統合し、「下級官人」とみなすことができる身分を選定した。

舍人：天皇や皇族などに近侍し、護衛・使節などをつとめた下級官人。四回登場。

・左衛門の陣のもとに、殿上人あまた立ちて、舍人の弓ども取りて馬ども驚かし笑ふを、はつかに見入れたれば、(三段「正月一日は」二七頁)

・春日祭の近衛舍人ども。(一五〇段「えせものの所得るをり」二七五頁)

・雷鳴の陣の舍人。(二四〇段「ことばなめげなるもの」三七三頁)

・(中宮が清少納言に)「さは、入れ」とて、召しあぐるを、下にゐたる人々は、「殿上許さるる内舍人なり」と笑へど、(二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」四二二頁)

隨身：太上天皇、摂政関白、左右近衛府の大・中・少将などの身邊警固にあたる武官。八回登場。詳しくは第二章第一節にて述べる。

・をのこは、また隨身こそあめれ。いみじうびしくてをかしう君達も、隨身なきはいとしらじらし。(四十六段「をのこは、また隨身こそ」一〇三頁)

・雑色、隨身は、すこしやせてほそやかなるぞよき。男は、なほ若きほどは、さる方なるぞよき。いたく肥えたるは、いねぶたからむと見ゆ。(五一「段」雑色、隨身は」一一〇頁)

・五位六位などの、下襲の裾はさみて、笏のいと白きに、扇うち置きなど、行きちがひ、また、装束し、壺胡録負ひたる隨身の出で入りしたる、いとつきづきし。(五八段「よき家の中門あ

けて」一一四頁)

・まいて、臨時の祭りの調楽などは、いみじうをかし。主殿の官人、長き松を高くともして、頸は引き入れて行けば、先はさしつけつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹きたてて、心ことに思ひたるに、君達昼の装束して立ちとまり、物言ひなどするに、供の隨身どもの、前駆をしのびやかに短う、おのが君達の料に追ひたるも、遊びにまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。
(七三段「うちの局」一三〇頁)

・隨身の長の狩衣。衲の袈裟。出居の少将。いみじう肥えたる人の髪おほかる。六、七月の修法の、日中の時行ふ阿闍梨。
(一一九段「暑げなるもの」一二九頁)

・ただ隨身四人、いみじう装束きたり、馬副の、ほそく白くしたてたるばかりして、二条の大路の広く清げなるに、めでたき馬をうちはやめていそぎまゐりて、すこし遠くより下りて、そばの御簾の前に候ひたまひしなどいとをかし。(一二三段「はしたなきもの」二三三頁)

・白き単衣の、いたうしほみたるをうちまもりつつ書き果てて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、小舎人童、つきづきしき隨身など、近う呼び寄せてささめき取らせて、いぬる後も久しうながめて、経などのさるべき所々、しのびやかに口ずさびよみぬるに、奥の方に御粥、手水などしてそそのかせば、歩み入りても、文机に押しかかりて文などをぞ見る。(一一八二段「好き好きしくて人かず見る人の」三二〇頁)

・隨身めきて、ほそやかなるをのこの、傘さして、そばの方なる扉の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。

(二七五段「常に文おこする人の」四三〇頁)

大進：中宮職の三等官。六段「大進生昌が家に」章段全体に登場するため、清少納言が生昌について言及した箇所のみ抜粋する。
・いで、いとわろくこそおはしけれ。など、その門はたせばくは造りて住みたまひける。(三四頁)
・障子を五寸ばかりあけて言ふなりけり。いみじうをかし。
(三五頁)

・さらにかやうの好き好きしわざ夢にせぬものを、わが家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。(三五頁)

采女：宮内省に置かれた下級女官であり、天皇の食事に奉仕する女官。三回登場。

・こなたの御手水は、番の采女の青裾濃の裳、唐衣、裙帯、領布などして、面いと白くて、下など取り次ぎまゐるほど、これはたおほやけしう、唐めきてをかし。(一〇〇段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」二〇三頁)

・節会の御まかなひの采女。(一五〇段「えせものの所得るをり」二七六頁)

・いかなるらむと心もとなく思ふに、からうじて、采女八人馬に乗せて引き出づ。(二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」四〇八頁)

主殿司：後宮に奉仕して掃除薪炭などのことをつかさどった下級女

官。または、宮内省主殿寮に属していた男性の役人。それぞれ四回ずつ登場。性別を判別しがたい主殿司も二例あった。どちらも使者として扱われているところが、すべての場面で貴族の使者として登場した男性の主殿司と特徴が似ている。よって、本論では、性別不明の主殿司は、男性の主殿司であったと定義する。女性の主殿司に関しては、清少納言が何らかの評価を下しており、主殿司という身分の存在意義について知ることができる。また、男性の地下である隨身と比較するために、本論では、女性の主殿司のみを、第二章第二節にて検討する。

(女性の主殿司)

・左衛門の陣のもとに、殿上人などあまた立ちて、舎人の弓ども取りて馬どもおどろかし笑ふを、はつかに見入れたれば、立藪などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。(三段「正月一日は」二七頁)

・主殿司こそ、なほをかききものはあれ。下女の際は、さばかりうらやましきものはなし。よき人にもせさせまほしきわざなめり。若くかたちよからむが、なりなどよくてあらむは、ましてよからむかし。すこし老いて、物の例知り、面なきさまなるも、いとつきづきしく目やすし。主殿司の、顔愛敬づきたらむ一人持たりて、装束時にしたがひ、裳、唐衣など、今めかしくて、ありかせばやとこそおほゆれ。(四五段「主殿司こそ」一〇二・一〇三頁)

・「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々などのいひけるを、「やや、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわが

る。(五十四段「殿上の名対面こそ」一一二頁)

・内は、五節のころこそすすろにただ、なべて見ゆる人もをかしうおほゆれ。主殿司などの、色々のさいでを、物忌のやうにて、叙子につけたるなどもめづらしう見ゆ。宣耀殿のそり橋に、元結のむら濃、いとけざやかにて出であたるも、さまざまにつけてをかしうのみぞある。(八八段「内は、五節のころこそ」一七三頁)

(男性の主殿司)

・炭櫃のもとにゐたれば、そこにまた、あまたゐて物など言ふに、「なにがし候ふ」といとはなやかに言ふ。「あやし。いつのまに何事のあるぞ。」と問はすれば、主殿司なりけり。「ただここもとに人づてならで申すべき事なむ」と言へば、さし出でて、言ふ事、「これ頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく。」と言ふ。(七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」一三五頁)

・「頭中将の宿直所にすこし人人しき限り、六位まであつまりて、よろづの人の上、昔今と語り出でて言ひしついでに、『なほこの者、むげに絶え果ててのちこそさすがにえあらね。もし言ひ出づる事もやと待てど、いささかなんとも思ひたらず、つれなきもいとねたきを、今宵あしともよしとも定めきりてやみなむかし』とて、みな言ひ合わせたりし事を、『ただ今は見るまじ』とて入りぬ」と、主殿司が言ひしかば、また追ひ返して、『ただ、手をとらへて、東西せさせず乞ひ取りて、持て来ずは、文を返し取れ』といましめて、さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いととく帰り来、『これ』とて、さし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとてうち見たるに、あはせてを

めけば、『あやし、いかなる事ぞ』と、みな寄りて見るに、『い
みじき盗人を。なほえこそ思ひ捨つまじけれ』とて、見さわぎ
で、『これが本つけてやらむ。源中将つけよ』など、夜ふくる
までつけわづらひてやみにしことは、行く先も、語りつたふべ
き事なりなどなむみな定めし』(七八段「頭中将のすずるなる
そら言を聞きて」一三七・一三八頁)

・心もなの事やと聞くほどに、主殿司来て、「頭の殿の聞えさせ
たまふ、『ただ今まかづるを、聞ゆべき事なむある』』と言へ
ば、「見るべき事ありて、上へなむのほりはべる。そこにて」
と言ひてやりつ。(七九段「返る年の二月二十余日」一四二頁)
・二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪
すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」
と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とてあるを
見れば、懐紙に、「すこし春ある心地こそすれ」とあるは、げ
に今日のけしきに、いとようあひたる、これが本はいかでかつ
くべからむと思ひわづらひぬ。(一〇二段「二月つごもりごろ
に、風いたう吹きて」二〇九頁)

(性別不明の主殿司)

・頭弁の御もとより、主殿司、ゑなどやうなる物を、白き色紙に
包みて、梅の花のいみじう咲きたるにつけて持て来たり。
(一二七段「二月、官の司に」一三八頁)
・(清少納言が)「かならずしもいかでかは、そのほどに(藤原齊
信を)見つけなどもせむ。文書きて、主殿司してもやらむ」
(一五五段「故殿の御服のころ」二八六頁)

所の衆：六位の侍から選抜された雑用役。四回登場。

・所の衆どもの、衝重取りて、前どもにすゑわたしたる。
(二三六段「なほめでたきこと」二五五頁)
・季の御読経、御仏名などの御装束の所の衆。(一五〇段「えせ
ものの所得るをり」二七五頁)

・はるかけに言ひつれど、ほどなく還らせたまふ。扇よりはじ
め、青朽葉どもの、いとをかしう見ゆるに、所の衆の、青色に
白襲をけしきばかりひきかけたるは、卯の花の垣根近うおぼえ
て、郭公も陰に隠れぬべくぞ見ゆるかし。(二〇六段「見物は」
三四四頁)

・よき所に立てむといそがせば、とく出でて待つほど、ぬ入り、
立ちあがりなど、暑く苦しきに困ずるほどに、斎院の垣下にま
ゐりける殿上人、所の衆、弁、少納言など、七つ八つと引き続
けて、院の方より走らせて来るこそ、「事なりにけり」とおど
ろかれて、うれしけれ。(二二二段「よろづの事よりも、わび
しげなる車に」三五五頁)

御廁人：宮中で便所の掃除などをする最底辺の女官。一回登場。

・御廁人なる者走り来て、「あないみじ。犬を蔵人二人して打ち
たまふ。死ぬべし。犬をながさせたまひけるが、帰りまゐりた
るとて、てうじたまふ」と言ふ。(七段「上に候ふ御猫は」
四〇頁)

陪従：舞人に陪従する義で地下の役人。二回登場。

・陪従も、その庭ばかりは御前にて、出で入るぞかし。(一三六

段「なほめでたきこそ」二五五頁)

・なほ過ぎぬる方を見送るに、陪従のしなおくれたる、柳に挿頭
の山吹わりなく見ゆれど、泥障いと高うち鳴らして、「神の社
のゆふだすき」とうたひたるは、いとをかし。(二〇六段「見
物は」三四一頁)

掃部司：宮内省に属し、宮中の席、床、清掃、施設のことをつかさ
どる。二回登場。

・清涼殿の御前に、掃部司の、畳を敷きて、使は北向きに、舞人
は御前の方に向きて。——中略——

掃部司の者ども、畳取るやおそしと、主殿の官人、手ごとに
箒取りて、砂子ならず。(一三六段「なほめでたきこと」
二五五・二五六頁)

・掃部司まゐりて、御格子まゐる。(二六〇段「関白殿、二月
二十一日に、法興院の」三九九頁)

右衛門尉：右衛門府の三等官。一回登場。

・右衛門尉なりける者の、えせなる男親を持たりて、人の見るに
面伏せなりと、苦しう思ひけるが、伊予国よりのぼるとて、波
に落し入れけるを、「人の心ばかりあさましかりける事なし」
とあさましがるほどに、七月十五日、盆奉るとていそぐを見た
まひて、道明阿闍梨、「わたつ海に親おし入れてこのぬしの盆
する見るぞあはれなりける」とよみたまひけむこそ、をかしけ
れ。(二八七段「右衛門尉なりける者の、えせなる男親を持た
りて」四四二頁)

以上のような結果となった。この時点で主な共通点としては、どの
身分も類聚的章段への登場が多いことである。ここから、清少納言
が、その身分がどうあるべきと考えていたのか読み取ることができ
る。この中から地下の種類をさらに分け、第二章でその存在意義を
論じる。本論では、登場回数が多く、貴人の側近となることができ
た男性の隨身、後宮に奉仕する下級女官であった主殿司を取り上
げる。

一方で、官位が与えられず、役職も明記されなかった身分も少な
からず存在した。当時の人口を考えると、そのような身分が大多数
を占めていたのだろう。これらを、本論では、下衆と定義する。そ
れは、官職とは言い難い役割を与えられた宮中で働く下仕えの者
や、郊外の百姓などの庶民が当てはまる。この当時、平安京に住む
住民は、「京戸」と呼ばれ、口分田を与えられていた。しかし、経
営の困難さから、貴族に仕える者や、香料や用材などの唐物を売る
商人になったそうである^{一五}。また、百姓が宮中に雑用などとして
出仕する者もあり、こちらは税である庸や雑徭が免除されるとい
うメリットがあった^{一六}。ただ、作中では「百姓」などの記述はなく、
明確な身分が判別されない^{一七}ので、作中において「身分の低い者・下
賤の者」と意味される「下衆」という表現が登場した箇所を、以下
に抽出する。なお、登場回数が二二回とかなり多いため、ここでは
下衆の特徴がわかる例を挙げるのみに留める。詳しくは、第三章に
て取り上げていきたい。

・同じことなれども聞き耳ことなるもの。法師のことば。男のことば。女のことば。下衆の言葉には、かならず文字あまりたり。(四段「同じことなれども」三二頁)

・男も女も、法師も宮仕へ所などより、同じやうなる人もろともに、寺へ詣で物へも行くに、このましようこぼれ出で、用意よく、言はばけしからず、あまり見苦しとも見つべくぞあるに、さるべき人の馬にても、行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、好き好きし下衆などの、人などに語りつべからむをがなと思ふも、いとけしからず。(九四段「くちをしきもの」一八三頁)

・きらきらしくよきなどをば、いとさしも押しひしがず。いと清げなれど、またひなび、あやしき下衆など絶えず呼び寄せ、出だしすゑなどしたるもあるぞかし。(二二一段「よろづの事よりも、わびしげなる車に」三五六頁)

・よろしき男を、下衆女などのほめて、「いみじうおはします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。また、ほむるままに言ひそこなひつるものは。(二九一段「よろしき男を、下衆女などのほめて」四四五頁)

下衆の用例、二十二例のうち六例は「下衆女」、二例は「下衆男」とあり、身分の低い男性や女性に対する、清少納言の意識を読み取ることができる。本論では、特に下衆女の登場頻度を考慮し、性別にかかわらない「下衆」と、二回登場した「下衆男」について第三章第一節にて考察する。また、「下衆女」については第二節にて、

それぞれ取り上げて考察していく。

第二節 他作品にみられる地下

第一節では、平安時代の身分制度を概説し、『枕草子』における地下と下衆の登場の仕方を注視した。第二節では、他作品との用例の違いを明瞭にすべく、『枕草子』以外の作品から、地下について取り上げる。ここでは平安時代における作品に登場した地下がどれほど登場したかという問題意識で考察する。本論で取り上げる作品は、『枕草子』と同時代であり、宮中とかかわりのある作品として、『うつほ物語』、『源氏物語』、『紫式部日記』とする。なお、本文は、いずれもジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』から引用する。

	『枕草子』	『うつほ物語』	『源氏物語』	『紫式部日記』
隨身	八	一六	三六	三
采女	三	一	二	一
主殿司	一〇	一	〇	二
舍人	四	二〇	一二	〇
所の衆	四	二	〇	〇
御厠人	一	一	一	〇
掃部司	二	〇	〇	一
陪従	二	六	一	〇
右衛門尉	一	四	〇	〇

以上のような結果となった。『枕草子』に登場した身分が多く登場した作品は、『うつほ物語』である。また、これらの作品の中で最も分量が多いのは『源氏物語』であるが、隨身や舎人は多かつたものの、他はあまり登場しなかった。『紫式部日記』に至っては、地下身分はほとんど見受けられない。これは他の三作品と比べて分量が少ないことに起因しているが、それ以外にも、紫式部が地下に対して興味が無い、宮中でのかわりが少ないなど、作者の性格や職掌にもよるものであると思われる。白土ルリ子（一九六一）は、「〔紫式部は〕白昼自分の素顔を人前にさらすという事がどうにも合点のゆかない事であったのではあるまいか」とし、紫式部が引つ込み思案な性格であったと言及している^{一七}。つまり、日常において地下のような身分の低い人々に出会うことがあまりなかったのである。その一方で、『枕草子』は同じ日記的性質をもつ作品として、地下の登場回数が多いのは比べるまでもない。ここに、女房の性格と地下の登場回数による相関性を見出すことができるかもしれない。

では、『うつほ物語』や『源氏物語』、『紫式部日記』では、どのような形で地下が登場したのだろうか。『枕草子』と比較して、登場回数が比較的多く、特徴的な場面が見られた身分として、隨身、舎人の代表的な描写を取り上げる。

隨身

『うつほ物語』

①御隨身、御前の人々、みなかづけたまひて、楼へみなおはす。〔春日詣〕三段「忠こそ、熊野への途中春日神社に立ち寄る」二七〇頁

『源氏物語』

②（光源氏が）「をちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身つゐりて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。〔夕顔〕一段、一三六頁

③殿（薫）の御隨身、かの少輔が家にて時々見る男なれば、「まうとは、何しにここにはたびたびは参るぞ」と問ふ。〔浮舟〕二四段、一七〇頁

『紫式部日記』

④渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらせたまふ。〔三段「朝露のおみなえし」〕一二五頁

以上のように隨身が登場した。特徴としては、大きく二点あると思われる。

一点目は、「御隨身」という表現があることだ。こちらは、『枕草子』では見られない表現である。この表現は、三作品共にみられた。例えば、『うつほ物語』では、①のように仲忠の隨身に、『紫式部日記』では、④のように藤原道長の隨身につけられていた。そもそも隨身がつく身分は、第二章第一節にて詳述するが、殿上人のよいうな、かなり身分の高い者である。つまり、主人の所有物への敬意ということ、「御」が使われていたのではないか。ただし、そうであるならば『枕草子』でも特定の登場人物につけられるはずであ

る。例えば一二三段の藤原齊信の隨身にも、公卿付きの隨身ということ、「御」はつけられるべきであるが、ただの「隨身」という表記であった。清少納言は、高位の人物には当然のごとく敬語を付すが、隨身は地下であるゆえに、つけなくともよいと判断していたのではないか。この辺りは、作者によって判断基準が分かれていたと考えられる。

二点目は、隨身が話したセリフが明記されていることである。このような表現は、『枕草子』には見受けられなかった。隨身が物語の進行において大きな役割を果たしていたことがうかがえよう。例えば、②の文章は、『源氏物語』「夕顔」巻では、光源氏に付いていた隨身が、あなたが見ている花の名は夕顔であると教えている。これ以降、光源氏は夕顔と呼ばれる女性と関係を深めていくのである。夕顔のもとに通う際、必ず同行させたのはその隨身であった。これについて竹内正彦（二〇一四）は、「光源氏自身が名告つてない限り、その隨身が光源氏のそれであると誰も断定できないし、一方で、光源氏が素性を隠している限り、この隨身を帯同しなければ、通ってくる人物が同一の人物か否かも判断できないのであった。」としている¹⁸。つまり、隨身は、通ってくる男が誰であるか夕顔に判別されるための存在であった。そのような重要な役割を背負った隨身が多く登場することが、セリフを付された所以なのだろう。③では、薫についていた隨身が、匂宮の秘密を暴くことになるなど物語においてさらに重要な役割を見せていることから、『源氏物語』における隨身の存在価値は、やはり高いことがうかがえる。

次に、舎人について論ずる。こちらは、『うつほ物語』、『源氏物語』のどちらにも多く登場している。どのような形で登場するか、

いくつか例を挙げる。

舎人

『うつほ物語』

①御前の御馬添ひの男どもは、「仕へ所に遣はし、獄所にさぶらはせむ」と勘当せられ、舎人、雑色をば、打ち縛らせなどしたまふ。（俊蔭）二一段「大臣家の騒ぎ 人々若小君を探し出す」五九頁）

②御隨身、舎人どもは「何ぞの行ひ人ぞ。神わざのところには出で来べきものか」など、咎めののしれば、（忠こそ）ただかくいひて立てり。めづらしく風の調ぶる琴の音を聞く山人は神も咎めじ（春日詣）三段「忠こそ、熊野への途中春日神社に立ち寄る」二七〇頁）

③夜更けて、上達部、親王たちもものかづきたまひて、いちの舎人までものかづき、祿などしてみな立ちたまひぬ。（嵯峨の院）二八段「賭弓の饗宴に、仲頼あて宮を見て思い悩む」三五九頁）

『源氏物語』

④女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞをかしかりける。（蛩）七段「六条院において、馬場の競射を催す」二〇六頁）

⑤召次、舎人などの中には、乱りがほしきまで、いかめしくな
んありける。げに、かく、にぎははしく華やかなることは見る
かひあれば、物語などにも、まづ言ひたてたるにやあらむ、さ
れど、くはしくは、えぞ数へたてざりけるとや。「宿木」二一
段「薫、匂宮の婚儀につけて、わが心を省みる」四一六頁)

このように登場する。舎人は何らかの身分とともに登場する傾向に
あった。舎人の職業は、天皇や皇族などに近侍して、護衛などを務
めた下級官人であり、律令制下にはさまざまな種類があり、内舎人
には九十人、大舎人には左右八百人、東宮舎人には六百人、中宮舎
人には四百人がおかれた^{一九}。ここから、当時の宮中には大勢の舎
人と呼ばれる人々が出仕していたことがわかる。それ故に、物語を
進行させるうえで使い勝手の良い存在となっていたのではないだろ
うか。『うつほ物語』では①のように痛みを受ける役になったり、
②のように忠こそが歌を詠むための火付け役になったりと、他にも
さまざまな理由で登場している。ただ、いずれも脇役の立場という
形に収まっており、舎人が、『源氏物語』における随身のように、
主役との結びつきが強く、同等の存在であるとは言い難い。では、
舎人は他作品でも同じような扱いを受けているのだろうか。『源氏
物語』では、④のように舎人が美しい装束を着て秘術をしているの
を見るのが「をかし」と言われたり、⑤のようにさまざまな身分が
祝儀をもらう中に、末端の舎人まで祝儀をはずむ描写があるなど、
華やかな場面の一部として登場したりすることがある。華やかな描
写は、③のように『うつほ物語』にもあるが、舎人の前にある「い

ちの」の意味については本来「一番目の」という意味があり^{二〇}、

⑤のように「舎人全員に」禄を授与したかどうかは疑問である。
いずれにせよ、『源氏物語』における舎人は、『うつほ物語』とは
また異なる扱いを受けており、地下は、身分が低いからと言って哀
れな扱いを受けるとは一概にはいえない。つまり、各々の作品に
よって地下の扱われ方は異なるのである。随身と舎人のように、そ
の職業の役割や、宮中での貴族とのかかわり方次第で作品への登場
の仕方は変わるため、当然『枕草子』でも、ここでは異なる地下の
扱い方を読み取ることができると思われる。では、『枕草子』では
地下がどのような存在として登場するのだろうか。第二章にて、随
身と主殿司を取り上げて詳しく考察していきたい。

第三節 他作品にみられる下衆

本節では、『枕草子』以外にみられる下衆を調査した。先ほど第
二節にて考察した地下は、作品によって、また、その職業によって
異なる扱いを受けていることが判明した。では、下衆はどのような
扱いを受けているだろうか。こちらも第二節と同じく、『うつほ物
語』、『源氏物語』、『紫式部日記』から登場回数を抜粋し、特徴的な
役割を持つ例を挙げて考察する。

下衆	二二二	七	二二五	〇
	『枕草子』	『うつほ物語』	『源氏物語』	『紫式部日記』

このような結果となった。「下衆」という表現を見ると、『枕草子』と『源氏物語』における登場回数は圧倒的に多い。ただし、『源氏物語』は『枕草子』に比べて膨大な分量のため、全文における下衆の割合は、『枕草子』が勝ることに留意されたい。『うつほ物語』は、先ほど地下を調査した際には多く登場したが、下衆に限ってはそう多くない。『紫式部日記』は、おそらくは紫式部の内向的な性格ゆえに下衆とのかかわりを持っていなかったからか、一度も登場することはなかった。そのため、『うつほ物語』と『源氏物語』に登場する下衆について特徴的な例を示す。

『うつほ物語』

①（子が）「いざたまへ、まろがまかる所へ。こことても、まろならぬ人の見えばこそあらめ、かく出でてまかり歩くほど、つれづれと待ちたまふほど苦しいおはすらむ。かくて悪しうも、ようもまかり歩かむと思へど、人の馬、牛飼はせても使はば、親のために、さる下衆の母といたはれたまはむことと思ふ。」
〔俊蔭〕三〇段、七八頁〕

俊蔭の娘（以降、母）は、若小君（のちの藤原兼雅）との間にできた息子と暮らしていたが、生活に困窮する。そこで、まだ五、六歳ながら大人のような見た目で、孝養に優れていた息子は北山にて、人が住むのによさそうな木のうつほを見つけた。しかし、そこにはクマが住んでいたため、クマを説得し、うつほを譲り受けた息子は、母にそこに住もうと呼びかける。そのセリフの中に、下衆が登場する。俊蔭が没して以来、この親子は凋落した生活を余儀なくさ

れ、世間体が悪くなっていたのだろう。息子は、自分の母が下衆の母と言われることがつらいとし、山へ引きこもることを決断したのである。もともと俊蔭は清原王と皇女の間でできた子で、学才に優れ、容姿端麗であり、殿上人までに昇進していたが、天皇の命に背いた結果、貧しくなってしまった。ここでの下衆は、俊蔭が没した後も、子や孫の世代にまで貧困が続き、落ちぶれている有様を表現している。

また、その後、息子は、母子ともに藤原兼雅によって、三条堀川の屋敷に移る。十六の時に元服して仲忠という名前になり、『うつほ物語』の新たな主人公として活躍していく。「下衆」という言葉は、そんな仲忠が、幼少期はいかに落ちぶれていたか表現するため用いられていたのではないか。

②（女一の宮の乳母が）「いと恐ろしきことをこそ聞きはべりつれ。二の宮の越後の乳母は、宰相の中將に盗ませたまつらむとたばかりで、多くの物賜はりにけるは。大きな瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に絹、綾入れてこそ賜はりにける。かかること知りたる下衆を、はかなきことにてうち追ひ出でければ、腹立ちていひののしりければ、みな人聞きはべりつ。」〔国譲 下〕五七段、三八四頁〕

この章段は、仲忠が成長し、朱雀院と仁寿殿女御の娘である女一の宮との間に男の子を出産した後の話である。女一の宮は、これより以前にいぬ宮という女の子を出産していたが、今回は難産であったという。その混乱に乗じて、以前から女二の宮を慕っている五の宮

が、女二の宮の乳母をわいろで買収し、女二の宮を略奪しようとしていたことが下衆の言いふらしから発覚したのである。これが女一の宮の耳に入ったが、特に気にせず、仲忠も「子を産んだ後だけど、あなたもそのように謀られるといいね」と冗談を言っており、特に大事件に発展したわけではないといった内容である。ここでの下衆は、情報をすぐに言いふらしたわけではない。何らかの事情があつて、勤め先を解雇されてしまったことの怒りから五の宮について言いふらすようになったのである。解雇された下衆の心情を察すると、そうしてしまったのは道理にかなつているともいえる。また、主である五の宮へのこのような報復は、五の宮邸の管理体制の甘さを示している。

まとめると、『うつほ物語』における下衆は①のように、身分が低く落ちぶれた例えとなる。また、②のように、重要な情報を握っており、主要人物の人となりを示す存在であることがわかった。

『源氏物語』

③八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもはかなき板葺なりしなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。(「蓬生」四段、三三〇頁)

「蓬生」は、源氏が二八、二九歳頃の話である。常陸宮の娘である末摘花のもとに通うようになるが、いつしか忘れ、末摘花は困窮した生活を強いられることとなる。③は、その窮乏を表す一文である。家は中も外も荒れ果てて、もう勤めようとする下仕えもいなくなつてしまったという内容である。下衆がいなくなることで、末摘花の

貧しさがより強調されている。それでも懸命に生きる末摘花に憐憫の情を抱く読者も多くなることだろう。下衆がいなくなったことは、末摘花の落ちぶれた生活描写の一部として、十分な機能を果たしている。

④(略) かの渡りたまはんとすることによりて、下衆ども、みなはかばかしきは、御厨子所などあるべかしきことどもを、かかるわたりには急ぐものなりければ、ぬしづまりなどしたるに、ただ四五人してここなる物を見るに、変ることもなし。(略) 弟子ども、「たいだいしきわざかな。いたうわづらひたまふ人の御あたりに、よからぬものをとり入れて、穢らひかならず出で来なんとす」と、もどくもあり。また、「物の変化のもあれ、目に見す見す、生ける人を、かかる雨にうち失はせんはいみじきことなれば」など、心々に言ふ。下衆などは、いと騒がしく、ものをうたて言ひなすものなれば、人騒がしからぬ隠れの方になん臥せたりける。(「手習」三段、二八二、二八五、二八六頁)

「手習」は、『源氏物語』の中でも終盤に位置付けられている。すでに源氏は没し、源氏と女三の宮の間に授かった薫という男君が二七、二八才ごろの話である。「手習」だけでも五回にわたつて下衆が登場しており、「浮舟」や「蜻蛉」にもそれぞれ六回登場していることから、後半になって下衆が登場する回数が増えるのである。引用した④の文章は、横川の僧都が、倒れている若い女を発見し、下衆が数人で、どうも不思議なその女を時間が変わつても見続けて

いる場面である。僧都はこの女を助けようとするものの、弟子や下衆が何かと言いがかりをつけ、ある弟子は「邸には病人がいるのにこんな得体のしれない人を置いておけない」、またある弟子は「まだ命ある人を死なせることは大変もどかしい」と口々に言いあっている。下衆はとても騒がしくそういったことを何度も言うので、僧都は、女を人のいない部屋に寝かせたということである。

ここでの下衆は、一度目は、時間をかけて女を確認しているという下衆の行動から、女の不思議さを強調することができる。二度目は、「いと騒がし」とあり、倒れている女に対する配慮もなく、思い思いの言葉を並べる迷惑極まりない存在として登場していたと思われる。また、弟子と下衆という二種類の身分が登場すること、そのうるさい騒ぎぶりを増幅させている。下衆は、物語において表現を強調するために存在しているのではないか。

その後の展開として、実はこの女は、薫の愛人であった浮舟であり、一度薫の前から姿を消していたが、僧都に助けられ、薫は浮舟と再会する。しかし、浮舟の心は薫に傾くことなく物語は終わりを迎えてしまう。下衆は壮大な物語のほんの一部分に登場したに過ぎないが、困窮の度合や、騒ぎの様子を強調するなど、物語の進行においては、使い勝手の良い存在だったのではないか。また、『源氏物語』では「下衆下衆し」という表現があり、「手習」では、「いかにも下役らしい」という意味で使われている^三。ここでは、いかにも下役らしい法師たちが、「僧都が今日、下山される」と得意げに話しているのを浮舟が聞いており、出家の意思を固めるきっかけの一つとなっている。しかし、この法師たちは、作中において、セリフを三回与えられただけにとどまる。まさに、下役らしい使われ

方をされているのである。

『源氏物語』における下衆の③は、①と若干似ており、貧乏を強調するための存在である。また、④は、思慮の浅い下衆を読み取ることができた。

以上のように、他作品においても下衆は登場した。下衆は主要人物の身近に存在しており、基本的にはあまり良い印象を受けない扱われ方だが、ごくまれに物語の進行や、人物像の考察において影響力を持つことがわかった。下衆が無価値な脇役とは言えない。しかし、いずれにせよ、負の性質を持つていると思われる。そんな下衆は、『枕草子』においては、最も多い割合で登場する。どのように登場し、そこにどのような存在意義があるのだろうか。第三章にて、詳しく考察していく。

第二章 『枕草子』における地下

第一節 隨身

本節では、『枕草子』に登場した地下として、隨身について取り上げる。流れとしては、隨身の仕事内容を解説し、隨身が登場する『枕草子』の章段を調査し、作中の役割について見解を述べる。また、特にことわりのない限り、本文は、ジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集』からの引用である。

まずは、隨身という役職がどのようなものであったか述べる。『王朝文学文化歴史大事典』によると、隨身は、高貴な人の身辺警

固にあたる武官のことであり、近衛府に属している^{三〇}。隨身として選ばれる身分は、近衛府将曹以下である^{三一}。将曹は従七位下であり、これより下位の番長、府生なども隨身に選ばれており、地下と呼ばれるべき身分が隨身として就いていることは確かである。「高貴な人」とは、例えば近衛府の高官である大将、中将、少将があり、こちらは本来近衛府が持つ警備役の一環である。しかし、時には上皇や摂政、関白その他につけられることもあり、こちらは勅によつて採用される^{三四}。そのため、隨身は、近衛府付きと、上皇・摂関などの貴族付きの二種類が存在すると考えてよいだろう。つけられる人数としては、上皇には将曹二人、府生二人、番長二人、近衛八人の計十四人があり、院の御隨身所に詰めていた。摂関は府生二人、番長二人、近衛六人の計十人、大臣の大将は府生一人、番長一人、近衛六人の計八人、納言、参議の大将は番長一人、近衛五人の計六人、中将は四人、少将は二人、諸衛府の督は四人、佐は二人つけられ、家の隨身所に属していた^{三五}。地位によつて人数は異なれど、最低でも二人の隨身をつけることができたようだ。また、上皇や摂関に仕える隨身は、関係が緊密であることから、私的な関係として雇われることもあり、その家で代々継承されることもあった^{三六}。そのような特徴を持つ地下であった隨身は、『枕草子』において、どのように登場するだろうか。調査の結果、隨身は八か所に登場した。それらの章段について、それぞれ考察していく。

①をのこは、また隨身こそあめれ。いみじうびびしくてをかしう君達も、隨身なきはいとしらじらし。弁などは、いとをかしき官に思ひたれど、下襲の裾短くて、隨身のなきぞ、いとわろ

きや。(四六段)をのこは、また隨身こそ」一〇三頁)

四六段では、隨身について肯定的な意見を読み取ることができる。要約すると、「召使の男なら隨身がよい。貴公子に隨身がないのは物足りない。弁官はとも立派な官だが、隨身がないならひどく見劣りする」といった内容である。弁官とは、太政官に属し、行政命令書を作る役職であり、実務の中枢的役割を果たした格式高い組織である^{三七}。『枕草子』作品内では、弁官は、藤原行成や平惟仲など、高名な人物が務めている。つまり、この章段では、弁官のような身分の高い者には、隨身のようなお付きの者がついていることが重要であると語っている。確かに、従者を多く抱えていると見栄えがよくなるだろう。当時は隨身がつく身分かそうでないかが男性官人の価値基準であり、女性の目で男性の評価をする際の可視的な基準であった^{三八}ことから、この章段も、それに則ったのだろう。この章段だけでも、隨身の存在意義が大いにあることがわかる。

②雑色、隨身は、すこしやせてほそやかなるぞよき。男は、なほ若きほどは、さる方なるぞよき。いたく肥えたるは、いねぶたからむと見ゆ。(五一段)「雑色、隨身は」一一〇頁)

先に述べた通り、高貴な身分に警護役として仕えるからか、作中では、隨身の体型について言及される。五一段では、少しやせ型であることが理想とされている。隨身には、何が起こつてもすぐに要人を守ることができるよう機敏な動作が求められたのではないだろうか。そのために、理想の体型にやせ型を挙げているのだろう。ま

た、この文の直後に、随身の体型を踏まえて「男は若いうちはそうあるべき」「太っている者は眠たそうに見える」とある。このような描写の理由として、田中重太郎（一九七二）は、「若い男が非活動的なのを憎む心から」、「ぴちぴちして元氣溼漑なのが若さの特性であり、動的な瞬間美をこよなく愛する清少納言の好みであったから」と述べている^{二九}。清少納言は、随身を引き合いに出して、自らの男の理想である「若さ」や「活動的」といった点を語ったのである。

③五位六位などの、下襲の裾はさみで、笏のいと白きに、扇うち置きなど、行きちがひ、また、装束し、壺胡籙負ひたる随身の出で入りしたる、いとつきづきし。（五八段「よき家の中門あけて」一一四頁）

五八段は、身分の高い者の家に貴人が来ており、その邸宅を清少納言が外から見ている場面である。その家の中門が開けてあり、檳榔毛の車が車立てに立ててあることを「めでたけれ」と称賛した後の描写に随身が登場している。檳榔毛の車は、『角川古語大辞典』によると、「上皇以下四位以上に使う車」ということで、高貴な人が訪れていたことがわかる。また、登場人物は、身分によって、書かれ方が異なっている。五位六位には「下襲」、「笏」がある。これは男性官人の正装である、束帯の一部である。しかし随身は、衣装に關しては「装束」程度にしか書かれていない。代わりに、壺胡籙と呼ばれる、儀式の際に地下の武官が使用する筒状の矢入れ^{三〇}を背負っている描写を前面に出している。随身が身分の低い存在であることを改めて思い知らされる描写である。しかし、清少納言は、そ

の姿を「とても似つかわしい」といった評価を下している。檳榔毛の車に乗るような人物に随身が付随していることで、見栄えが増したのであろう。

④まいて、臨時の祭りの調楽などは、いみじうをかし。主殿の官人、長き松を高くともして、頸は引き入れて行けば、先はさしつけつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹きたてて、心ことに思ひたるに、君達昼の装束して立ちとまり、物言ひなどするに、供の随身どもの、前軀をしのびやかに短う、おのが君達の料に追ひたるも、遊びにまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。（七三段「うちの局」一三〇頁）

七三段でも、随身に対しては肯定的である。「うちの局」とは、中宮の女房の局である、登華殿の西廂の細殿のことである。ここは清涼殿につながる通路にあたっているため、殿上人の往来が激しい。そこを通る人々について「いみじうをかし」と礼賛した後の文章である。「臨時の祭」は、十一月下酉日に下鴨神社、上賀茂神社で行われる、賀茂臨時祭のことである。「調楽」は、楽器舞踊の練習を意味することから、賀茂臨時祭に向けて練習することである。出演者は、摂関家の子女や皇族など、君達と呼ばれる身分から、舞人十人、楽人十二人が選ばれて、束帯姿で演奏する。清少納言は、この臨時の祭をひどく気に入っていたようである。例えば、二〇五段「笛は」では、箏の音はくつわ虫のようで不愉快だが、臨時の祭の時には、横笛を面白く聞いているところに、急に箏の音が笛とともに聞こえるのは、「ただいみじううるはし髪持たらむ人も、み

な立ちあがりぬべき心地すれ。」と称賛している^{三二}。臨時の祭では、普段見栄えしないものも見栄えするのである。七三段に戻って、この場面の内容は、調楽のために、主殿寮の役人が首を襟に入れながら松明をもって出演者を案内しているところ、楽人が楽器を鳴らして、清少納言がいつもより特別な気持ちになつてるところからはじまる。そこに束帯を着た君達がさらにやってきて、立ち止まって何か話をしている。隨身が主人の君達のために、声掛けをそつとしているのも、音楽に混じつていつになく面白く聞こえる、という内容である。ここで登場する隨身は、おそらく貴族付きの隨身であろう。その隨身がそつと声掛けをしているのは、演奏中の音楽を妨げないようにするためである。清少納言が「常に似ずをかしう聞ゆ」とほめた対象は、管弦の音色ではなく、声を潜めて前払いをしている隨身自体である。いつもの様子とはまた違った面白さというものを感じ取っていたのであろう。供役として立派に役割を果たしている隨身は、地下であつても美的表現の「をかし」の対象になることがわかる。

⑤隨身の長の狩衣。衲の袈裟。出居の少将。いみじう肥えたる人の髪おほかる。六、七月の修法の、日中の時行ふ阿闍梨。(一一九段「暑げなるもの」一二二頁)

一一九段では、隨身の長という身分が登場する。こちらは「貴人につけられた一定数の隨身の長」という意味になり^{三三}、着ている狩衣が暑苦しそうと清少納言は評価している。狩衣は、束帯よりは格が落ちるが殿上人の普段着であり、地下の正装でもあつた^{三四}。正

装ということは、おそらく五八段(③)に登場した壺胡籙も着用していたのだろう。そのような姿を「暑苦しそうだ」という評価を清少納言は下している。ほかに登場した「暑げなるもの」には、衲の袈裟という、厚い生地で作られた袈裟や、出居の少将といった、長時間日差しに照り付けられる仕事、太った人の髪が多いのがあげられる。いずれも暑苦しさを表現しており、隨身でも長になると、それだけ付属物も増えてきて、長時間武装した姿で日差しに照り付けられるということを暗示していると思われる。清少納言はその姿を見て、「なんとも暑苦しそうで気の毒だ」と感じていたのではないだろうか。

⑥ただ隨身四人、いみじう装束きたり、馬副の、ほそく白くしたてたるばかりして、二条の大路の広く清げなるに、めでたき馬をうちはやめていそぎまゐりて、すこし遠くより下りて、そばの御簾の前に候ひたまひしなどをかし。(一二三段「はしたなきもの」一二三三頁)

一二三段は、「はしたなきもの」に隨身が登場する。しかし、この章段は、「はしたなきもの」を羅列する類聚的章段と、一条天皇の八幡の行幸について書かれた随想的章段の二つに分かれており、隨身が登場するのは後者である。この部分について、池田亀鑑(一九六三)は、「三巻本および能因本では同じ段であるが、原作者の企図したことだろうか」^{三四}と疑問を抱いている。そのため、上坂信男・神作光一(二〇〇一)では、「断絶を認め」別々の章段となつている^{三五}など、諸本によって異なるが、本論においては、引

用先の『新編日本古典文学全集 枕草子』が同一の章段としていることに従う。八幡の行幸とは、九九五年、一条天皇が石清水八幡宮に行幸したことを指し、本文では、行幸からの還御の場面を描写している。一条天皇に付き添っていた、藤原齊信の付き人であった隨身に対して、「いとをかし」と、より強調された「をかし」を使つて称賛している。この隨身は、齊信についている隨身だと『新編日本古典文学全集 枕草子』では認めている^{三六}。四人というのは、中将には近衛舍人四人をつけることが定められていたからである^{三七}。彼らが立派な装束を着ていることから、還御に対して、より華を持たせる風景の一部となつていたのではないか。五八段(③) 同様、隨身は、高貴な人をより引き立たせる役割を持つている。

⑦ 白き単衣の、いたうしほみたるをうちまもりつつ書き果てて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、小舎人童、つきづきしき隨身など、近う呼び寄せてささめき取らせて、いぬる後も久しうながめて、経などのさるべき所々、しのびやかに口ずさびよみるたるに、奥の方に御粥、手水などしてそそのかせば、歩み入りても、文机に押しかかりて文などをぞ見る。
(一八二段「好き好きしくて人かず見る人の」三三〇頁)

一八二段では、たくさんの女性と深い関係を持つ独身の男が、どこへ行つていたのか明け方に帰つてきて、後朝の手紙を書いているところを描写している。この男は、隨身を持つことができるような高貴な身分だったのであろう。また、隨身が、小舎人童と同等の扱い

を受けており、警備という仕事以外にも、召使としての役割を持つている。おそらく、貴族に私的に雇われた隨身であり、この章段の主体である「好き好きしくて人かず見る人」の身分が高位であることとの存在感を出すために、隨身を記述したのではないか。

⑧ 隨身めきて、ほそやかなるをのこの、傘さして、そばの方なる塀の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。
(二七五段「常に文おこする人の」四三〇頁)

二七五段では常に後朝の手紙をよこす人について書かれている。その人が書いた手紙を、雨が降り続けている日に、隨身のようなやせた男が届けに来たことを「をかし」と描写している。ここでの隨身は、例えに使われるだけにとどまる。一八二段(⑦)のように、私的に雇われた召使だったのであろう。注目すべきは、「ほそやかなる」という表現である。五一段(②)に登場したものとまったく同じであるが、ここでは「雑色」は使われていない。清少納言は「やせている人」隨身」といったイメージを持っていたのではないだろうか。

ここまで、全八章段にわたる、『枕草子』における隨身について考察した。地下としての隨身は、『枕草子』では否定的な表現は見受けられず、少なくとも肯定的にとらえられていることが判明した。また、随想的章段に登場した隨身は、いずれも彼らより身分が高い者が先に登場しており、そのような人々に何らかの称賛を送つてから、隨身について書かれている。隨身が登場するということは、それだけ身分が高い人物が登場していることの証明になる。清

少納言は、隨身をそのような貴人の所有物と捉えたことから、否定的な表現を使わなかったのではないか。以上より、『枕草子』における隨身は、その主人がより高貴で華やかであったことを表現するために存在しているものと推察する。

第二節 主殿司

本節では、『枕草子』に登場した地下として、主殿司を取り上げる。こちらは第一節にて論じた男性官人の隨身とは異なり、主殿司（十例）の中でも女性官人を検討する。まずは後宮十二司の主殿司について概要を述べる。次に『枕草子』に登場した箇所を抽出し、それぞれ論じていく。

主殿司とは、律令制下にあった後宮十二司と呼ばれた官庁の一つである。後宮十二司には、主殿司以外に内侍司、蔵司、書司、薬司、兵司、闈司、掃司、水司、膳司、酒司、縫司がある。これらの身分は平安時代中期になると内侍司を中心とする大別して外局、内局に分かれ、主殿司は薬司や書司とともに、外局に属することとなった^{三八}。高島めぐみ（一九九八）によると、主殿司には、従六位相当の尚殿が一名、従八位相当の典殿が二名、無位である女孺が六名と決まっており^{三九}、位階から見ると、確かに地下と呼ばれるべき身分である。主な職掌としては、殿舎および行幸の際の諸施設の維持管理であり^{四〇}、具体的には庭の清掃や天皇の湯沐、火燭・薪炭を取り扱うなど^{四一}、生活における幅広い世話役として従事していたようだ。

ここで注意しておきたいことは、「主殿司」という表記には二つの意味があることだ。一つは先に挙げた後宮十二司の女官であり、

もう一方には、宮内省所属の官人がある^{四二}。こちらも役職は後宮十二司と同じであるが、主に男性が担当しており、官位も、頭が従五位下、助が従六位上、允が従七位であり、頭が貴族階級に入る官位である^{四三}。『枕草子』では、藤原行成や藤原公任などの使いとして描かれているが、清少納言が特に注目しているのは後宮に使える女官としての主殿司であるため、本論では前者についてのみ論ずることを承知されたい。なお、注釈から鑑みて、男性か女性か判別つかない主殿司についても、本論では除外して検討する。

では、女官としての主殿司は、どのように登場しただろうか。本文にて登場した四箇所の主殿司について論じたい。

左衛門の陣のもとに、殿上人などあまた立ちて、舎人の弓ども取りて馬どもおどろかし笑ふを、はつかに見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。（三段「正月一日は」二七頁）

この章段は、正月元日から七日、八日、十五日の宮中の様子について描かれた。主殿司は、そのうち七日に登場している。この日は若菜を摘んで羹にして食べる風習があり、若菜を見た宮中の人々が、物珍しいと騒いでいるところからはじまる。次に、この日は白馬の節会を拝観する習慣があった。人々は青毛の馬を見ると、年中の邪気を去ることができると考えていたようだ^{四四}。その催しに清少納言が見に行ったところ、左衛門に殿上人がたくさん立ち、舎人を驚かして笑っているが、ふと衝立の先を見ると、主殿司や女官が行ったり来たりしているのはおもしろいといった内容である。ここでは

隨身と同じく、「をかし」という美的表現が、主殿司に使われていることがわかる。また、主殿司は、下級女官という位置づけにあるはずだが、ここでは「女官」と区別されている。「女官」の読みは、ここでは「にようくわん」であり、下級女官であることを示している。反対に、身分の高い女性は、「によくわん」という呼び方をさられていたようだ^{四五}。主殿司は、本来であれば下級女官と呼ばれるべき身分である。しかし、この章段からは、清少納言から見た主殿司が、たんに「にようくわん」で括られない特別な存在であったことがうかがえる。その証明に、次に登場する四五段では、このように書かれている。

②主殿司こそ、なほをかしきものはあれ。下女の際は、さばかりうらやましきものはなし。よき人にもせさせまほしきわざなめり。若くかたちよからむが、なりなどよくてあらむは、ましてよからむかし。すこし老いて、物の例知り、面なきさまなるも、いとつきづきしく目やすし。主殿司の、顔愛敬づきたらむ一人持たりて、装束時にしたがひ、裳、唐衣など、今めかしくて、ありかせばやとこそおほゆれ。(四五段「主殿司こそ」一〇二頁)

四五段は主殿司についてのみ書かれた章段であり、清少納言が主殿司に対してどのような評価をしているか読み取ることが可能だ。「やはりすばらしい」ということは、主殿司を常々素晴らしいものとみなしていたのであり、この章段では、その再確認と言わんばかりの褒め称えようである。「をかし」という美的表現がここでも登

場し、主殿司の存在意義が肯定されていることを読み取ることができる。「下女」とは下級の女官のことを指しており^{四六}、前に登場した「にようくわん」と呼ばれるような身分のことだろう。主殿司が、決して身分が高くない存在であることを裏付けている。その主殿司に対して、本文では「下級女官としては、これほどうらやましいものはない」と、羨望の眼を向けるほどの賛辞がされている。また、「身分の高い人にもさせてみたい仕事である」と述べているが、これについては特に明確な理由は書かれていない。

また、これより先は女の在り方についても述べており、若いうちには美しく、年を取ったら先例を学び、物怖じしない無遠慮さを持つことが似つかわしいとされている。さらに、それを踏まえて、愛嬌のある主殿司を娘分にし、季節ごとに装束を変えて裳や唐衣を当世風にして歩かせたいとある。主殿司は、女を上げたり、雅の対象となったりする身分であり、清少納言は、そこに魅力を見出したのである。この次の章段、第二章第一節で述べた四六段「をのこは、隨身こそ」でも、同じく魅力ある地下について言及されている。

③「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々などいひけるを、「やや、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわがる。(五十四段「殿上の名対面こそ」一一二頁)

こちらも三段(①)同様、主殿司が、並一般の呼称とは区別された特別な存在であることがわかる。この章段の内容としては、清涼殿の殿上の間で行われる点呼についてである。ある日、方弘という蔵人が、点呼の手順を間違え、その責任を滝口になすりつけたとこ

る、滝口にも怒られてしまう。さらに天皇の御膳が置いてある棚に靴を置いてしまい、宮中が大騒ぎになったところを、気の毒がった主殿司などが登場して、「これは誰の靴だ。知りようがない」といったところ、「これは私（方弘）の汚いものだ」と名乗り出てさらに大騒ぎになったという場面である。主殿司は、靴が方弘のものであることを知っていたが、方弘をかばうために、あえてそうは言わなかったようだ^{四七}。しかし、方弘が自ら名乗り出てしまったため、その努力は水泡に帰す。方弘は、のちの一〇四段「方弘は、いみじう」でも笑いものにされるような存在である^{四八}ため、この行動には納得できる。主殿司が機転の利いた立ち回りができることを表現したかったのではないだろうか。

④内は、五節のころこそすずろにただ、なべて見ゆる人もをかしおほゆれ。主殿司などの、色々のさいでを、物忌のやうにて、叙子につけたるなどもめづらしう見ゆ。宣耀殿のそり橋に、元結のむら濃、いとけざやかにて出でゐたるも、さまざまにつけてをかしうのみぞある。（八八段「内は、五節のころこそ」一七三頁）

八八段では、五節舞のころに、普段見慣れた人が際立って輝くさまを描写している。豊明節会が十一月の収穫祭である新嘗祭の翌日に行われ、そこで五節舞を踊る五節舞姫は、九月ごろに公卿や受領の娘から二人ずつ決定された^{四九}。五節舞での主殿司の役割としては、五節舞をする舞姫がよく見えるように燭をもって照らすことである^{五〇}。火燭については平常時の主殿司の仕事であったから、式典

の際にこのような役目を任されるのは当然である。その際主殿司が、さまざまな鳥の子紙の薄いのを、物忌の札のよう簪につけているのが珍しく見えるとある。叙子というのは、正装の時に、髪を結いあげて挿す簪である^{五一}。それに鳥の子紙を装飾することで見栄えが増し、普段の姿とは異なって珍しく見えたのである。また、宣耀殿から常寧殿にある橋（清涼殿から承香殿への橋という説もある^{五二}）に座っていて、髻を結ぶ紐が紫の村濃染めになっているのがくつきり表れており、立ち出ている姿がただもう趣があるともほめていられる。橋にいるのは、常寧殿は舞姫たちの局として使われているので、支度している舞姫を待機していたのであろう。その主殿司の髪を結ぶ紐がまだら模様で、「をかしうのみぞある」ようだ。この「むら濃」という染め方は、ほかの章段にも登場しており、例えば三段「正月一日は」では、四月に行われる賀茂祭に使う青朽葉色や二藍色の衣装を染めたり^{五三}、三七段「節は」では、節供の日に女房が、長い菖蒲の根に村染めの組み紐を結びついたりしている^{五四}。いずれにせよ、何らかの式典がある際に登場するので、村濃染めは特別な染め方であることがわかる。日常でよく見る主殿司も、五節のような特別な日には華やかな見た目になり、それが「をかし」という美的表現の対象になるのである。

このようにみると、主殿司は、隨身とはまた異なった登場の仕方であるが、「をかし」を使われていることに変わりはないことがわかった。全体を見ても、肯定的な扱いを受けていることがわかる。隨身は貴族の付き人という性格が強かったが、主殿司もまた、下女として役割を果たし、また、「をかし」といった美的表現が使われ

た。そして美的表現は、臨時祭や五節舞など、華やかな式典が行われる日記的章段においても使われていた。主殿司は、下女として魅力的で、また、晴れの舞台の一部として、存在価値を見出すことができる。以上より、主に二つの身分の扱われ方を考慮し、『枕草子』における地下は、宮中の華やかさをより表現するために描かれた、装飾的存在であると結論付ける。

第三章 『枕草子』における下衆

第一節 下衆、下衆男

本節では、『枕草子』に登場する、下衆について、その扱われ方と存在意義について論ずる。ここでは、下衆に関して述べられている箇所と、わずかに登場する下衆男に関して述べられている部分を抜粋する。本文では、下衆は十二箇所、下衆男は二箇所見受けられた。

①同じことなれども聞き耳ことなるもの。法師のことば。男のことば。女のことば。下衆のことばには、かならず文字あまりたり。(四段「同じことなれども」三三頁)

下衆の初出は、冒頭に近い四段からである。「言葉は同じでも、聞いてみて違いの感じるもの」をいくつか挙げている。この章段全体は分量も多くないが、田中(一九七二)では、「日本語の位相が研究される以前にこのような記録をし、分類と批評を行ってくれた清

少納言の学者的な仕事に感謝したい」と、後世の国語学研究において貴重な資料となったことを評価している^{五五}。確かに、この章段からは、下衆が余計な言葉を言うことに言及されており、当時の庶民や下人がそれだけ目に留まる言葉遣いをしていたことを読み取ることができる。安東大隆(一九八六)では、下衆は地方人であり、地方の方言に根差す冗言・剩語であるとし、上衆のように、和歌の技術を活かした倒置や体言止めになっていないから、余計な言葉が多くつくとされていた^{五六}。つまり、①に登場した「ことば」の中で、下衆は唯一、低評価を受けている存在ではないか。

まず道理を説く法師から出る言葉は、ありがたく聞こえただろう。男、女については、現代でいう男言葉、女言葉にあたるものであろう。これらの良し悪しが直接記述されているわけではないが、下衆のように手短に伝えられそうな内容でもたらだと長く話している、聞き手が不快に思われることは容易に想像できよう。また逆に、一八六段では「言はんとす」などの言葉の「と」の省略について言及する。「言はんずる」と言うと、たちまちみつももないものになると言うなど、言葉をただ省略するだけでも、よく思われなかったようである^{五七}。清少納言は歌人の娘であったがゆえに、言葉遣いについては細心の注意を払っていた。それを気にも留めない下衆の言葉遣いには、辟易すると感じていたのではないだろうか。下衆が教養のない言葉遣いをしていたことを読み取ることができる。

②下衆の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるもくちをし。月の明きに屋形なきくるまのあひたる。また老いたる女の、腹高くてありく。若き男持ちたるだに見苦しきに、こと人

のもとへ行きたるとして腹立つよ。老いたる男の寝まどひたる。また、さやうに鬚がちなる者の椎つみたる。齒もなき女の梅食ひて酸がりたる。下衆の、紅の袴着たる。このごろは、そののみぞある。(四三段「にげなきもの」一〇〇・一〇一頁)

こちらも四段(①)と同じく、類聚的章段に登場する下衆である。「にげなきもの」とは、「似つかわしくないもの」であり、否定的な表現である。そのような意味を含む章段に二度も登場するあたり、やはり下衆は良い扱いを受けていない。

一回目は、下衆の家に雪が降ることが似つかわしくないとされている。雪が降ること自体は、清少納言は気に入っていたようだ。例えば、一七七段では清少納言はじめて宮中に来た頃の話をしている。局の格子を開けたところ雪が降っており、「雪、いとをかし。」と、美的表現を使用している^{五八}。また、一三三段は「降るものは」という類聚的章段であり、こちらでは「降るものは、雪、霰。」^{五九}とあることから、雪に対する清少納言の好感を読み取ることが可能だ。さらに、続けて「雪は、檜皮葺。」ともあり、檜皮葺の屋根に雪が降り積もるのがよいともあった。檜皮葺の屋根が使われる家は、神殿、皇居、貴人の邸宅であり、身分の高い人物が住まう家に使われていた^{六〇}。下衆は、「小屋・小家・小宅」とよばれる、広さ二十平方メートルにも満たない粗末な小屋で暮らしていたようだ^{六一}。しかも、『今昔物語集』には、藤原明衡が下衆の家に急遽泊まることになった時、その家の様子を「狭き小屋ナレバ、己ガ臥ス所ヨリ外ニ可臥キ所モ無カリケレバ」^{六二}と、一人寝るのが精いっぱいであることが描写されている。ここから、下衆の住まいは、狭苦しい

家であったことがわかる。そのような粗末な家に、檜皮葺の家と同じように雪が降っていることを、清少納言は到底許すことができなかったのではないか。下賤な人は、人物観のみならず、周辺の事象に関しても差別されているのである。また、下衆の家に月の光が入るのも残念だというのは、「夏は夜。月のころはさらなり」と、風流の象徴とされた月の光が下衆の家に入るのでは、雪と同じく、似つかわしくないと考えていたのだろう。

二例目は、下衆が紅の袴を着ていることに対して、似つかわしくないとされている。ここで登場する下衆は「下衆女」であるため、第二節にて改めて論じたい。

③「この雪の山いみじうまもりて、童べなどに踏み散らさせずこぼたせで、よくまもりて、十五日まで候へ。その日まであらば、めでたき縁給はせむとす。わたくしにも、いみじきよろこび言はむとす」など語らひて、常に台盤所の人、下衆などにくまるるを、くだ物や何やといとおほく取らせたれば、うちゑみて、「いとやすき事。たしかにまもりはべらむ。童べそのほりさぶらはむ」と言へば、「それを制して聞かざらむ者をば、申せ」など言ひ聞かせて、入らせたまひぬれば、七日まで候ひて出でぬ。(八三段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」一六一頁)

④人の出でて行くに、やがて起きゐて、下衆起こさするに、さらに起きねば、いみじうにくみ腹立ちて、起き出でたるやりて見すれば、「円座のほどもむ侍る。こもりいとかしこうまもり

て、童も寄せはべらず。『明日朝までも候ひぬべし。禄給はらむ』と申す」と言へば、いみじううれしくて、「いつしか明日になれば、歌よみて物に入れてまゐらせむ」と思ふ。いと心もとなくわびし。(八三段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」一六二頁)

この章段は、日記的章段にして、かなり長い内容である。職の御曹司に清少納言がいたころの話であり、九九八年末から九九九年正月までの期間とされている^{六三}。また関白であった藤原道隆はすでに故人であり、中宮定子が没する一年ほど前の話になる。職の御曹司の性格は、大臣や公卿の控え場所であり、内裏の東北、外記庁の北、左近衛府の西、梨本の南にあった^{六四}。しかし、この時中宮定子がここを住まいとした理由は、三田村雅子(二〇一四)によると、「花山院誤射事件の糾明が行われていた最中で、罪人の近親としての謹慎を表すもの」^{六五}であったそうだ。この事件は長徳の政変とも呼ばれており、中宮定子の兄である藤原伊周・隆家が流罪となり、中関白家没落のきっかけとなった事件である。中宮定子が、危うい立場にあったことは言うまでもない。この章段は、前半と後半に分かれており、前半では、常陸の介と呼ばれる乞食尼が宮中に訪れる話であるが、下衆は後半に、二回登場する。後半は、十二月十日に雪が降り、雪山が何日もつか、女房と日数を決めて対決しているという内容だ。ほかの女房は十日と言ったが、清少納言は正月の十五日までと、かなり長い日数もつことを宣言したという経緯がある。年が明けても雪山は崩れなかったので、子供が壊さないように、普段はにくまれている台盤所の女房や下衆に果物などを渡し、

雪山を守らせた。これが一度目の下衆の登場である。ここで判明することが、清少納言は下衆に憎まれていることを自覚していることだ。下衆はすでに否定的な内容の類聚的章段に多く登場しており、否定的な言及が多かった。それが下衆への態度に露骨に表れて、下衆に嫌われていたのだろうか。しかし、わざわざ報酬を事前に贈与して任せているということは、今回ばかりは下衆を信頼しようとしていたのであろう。あるいは、具体的に下衆たちに憎まれている内容を作中には読み取ることができないため、そもそも下衆に憎まれているのは、清少納言の思い込みであった可能性も考慮される。いずれにせよ、清少納言の私的な任務であるが、下衆の見守りによって雪山は壊されずに、そのまま残ることとなった。下衆が珍しく、作中で活躍したのである。

二度目は、正月三日から七日まで、中宮定子が内裏へ入御するたぬ、清少納言もそのお供で、職の御曹司を離れ、自宅に戻ったところである。やはり雪山がどうなっているか心配なので、使いの者に昼も夜も状況を伝えさせる。そして十四日の夜に雨が降り、雪山が崩れてしまわないか夜も心配で眠れず、誰かが出ていくのを見て、下衆を起こさせるが、なかなか起きないので腹が立った。ようやく起きた下衆を使いに行かせると、まだ雪山が残っていたという内容である。「わびし」も、明日を待ちきれずにそわそわしていることを表現している。つまり、清少納言は雪山が気になって心の余裕がない。「いみじう」といった強調表現を使用していることから、下衆に対しては特にいらだっていたのだろう。しかし、下衆が伝えた言葉は、いくらか心の安堵を与えたに違いない。自分に課せられた仕事をしっかり果たしている姿を、この章段からは二度読み取るこ

とができる。

⑤旅立ちたる所にて、下衆どものざれるたる。にくげなるちごを、おのが心地のかなしきままに、うつくしみ、かなしがり、これが声のままに、言ひたる事など語りたる。(九二段「かたはらいたきもの」一八一頁)

「かたはらいたきもの」とは、「見苦しいもの・いたたまれないもの」といった意味がある。ここで登場する下衆は、外泊先の下人という意味である。彼らが客人のいる家でふざけ合っている姿を見ることが、清少納言にとって見苦しいようだ。「使用人の恥は主人の恥である。」^{六六}ということ、使用人の躰がなっていない主人のことも、「にげなき」と、遠回しに発言しているのではないか。下衆の品性が、主人の品性や人格を決める基準としても機能していたことがわかる。なお、実際に貴族付きの下衆が起こした事件については、清少納言が宮中を去った後の一〇一三年に、相撲節会に興じていた三条天皇の眼前を、大勢の下衆が通り過ぎ、近衛に追いかけて烏帽子が取れるなど、散々な混乱があった。しかし、下衆は少しふざけたかっただけで、悪いことをしている自覚はなかったようだ^{六七}。そういった下衆の狼藉は「自己の従者たちを適切に管理できなかった人々の自業自得でしかなかったのだらう。」^{六八}としている。上司の教育の結果が部下の態度に露骨に表れることは、昔も今も変わらない。清少納言が嫌っていたのは、下衆だけではないということである。

⑥男も女も、法師も宮仕へ所などより、同じやうなる人もろともに、寺へ詣で物へも行くに、このまじうこぼれ出で、用意よく、言はばけしからず、あまり見苦しとも見つべくぞあるに、さるべき人の馬にても、行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、好き好きし下衆などの、人などに語りつべからむをがなと思ふも、いとけしからず。(九四段「くちをしきもの」一八三頁)

「くちをしきもの」とは、「残念なもの」といった意味がある。この章段は前半と後半に分かれており、下衆が登場したのは後半である。前半は、類聚的章段によくみられる、題目の形容詞に見合った事物を列挙する形式である^{六九}。後半は、「他人に承認されることで存在を得られる」といった内容が、外出時の美装を例に挙げて語られている。下衆には今回、「好き好きし」という形容詞があり、これは「風流心のある」^{七〇}という意味である。ただし、実際は下衆の中に「をかし」や「あはれ」を解する者を見つるのは困難であろう。内容は、「男も女も法師も、同じような身分の人々と一緒に、仕えているところから出かけるときには、衣装が好ましく牛車からこぼれ出て、趣向を凝らした風変わりな装飾で、「見苦しい」と言われそうにわざととしてあるのに、それをわかってくれそうな人が馬に乗っているのさえ見えることはないのは、とても残念である。困ったので、風流心を解し、人々に装飾のことを伝えてくれそうな下衆に会いたいと思うのも、とてもおかしいことだ。」と述べている。ここで清少納言が風流を解する「下衆」に会いたいと言っているのは、外出時は、高貴な人物に必ず会える保証はなく、目に入る

人々のほとんどが、そういった取るに足らない下賤の身分だったからであろう。清少納言は、どんな身分でもいいから、この装飾がいかに風流から逸脱しているか、珍しいか、語られてほしいと思っていたのではないか。ある事象を見たり聞いたりして、それが他人によって語られることがなければ、その事象は存在しないことと同義なのである。ここでは、下衆でもいいから、装飾の見苦しさを語ってほしかったと思っていたのだろう。

⑦人も会はなむと思ふに、さらにあやしき法師、下衆の言ふかひなきのみたまさかに見ゆるに、いとくちをしくて、近く来ぬれど、「いとかくてやまむは。この車のありさまぞ、人に語らせてこそやまめ」とて、一条殿のほどにとどめて、「侍従殿やおはします。郭公の声聞きて、今なむ帰る」と言はせたる使、「『ただいままる。しばし、あが君』となむのたまへる。侍にまひろげて、おはしつる、いそぎ立ちて、指貫奉りつ」と言ふ。(九五段「五月の御精進のほど」一八七頁)

五月とは、九九八年の五月である。この時中宮定子は中宮職に住んでいた。あらずじとしては、所在がないので、清少納言が「ホトトギスの声を聴きたい」と言ったところ、ほかの女房も賛成するので、車を手配して外出する。そこで通りがかった高階明順の家に訪れて、家の様子や、下衆女の稲こきを見物する。こちらの詳しい内容については、第三節にて考察する。そのあとホトトギスの音色を堪能し、帰ろうとするところに、卯の花がたくさん咲いているのを見て、車に挿せるところに挿し、「卯の花の垣根を牛にかけたる」

さまになった車で帰る。その様を誰かに見てほしいのに、身分の低い下衆や法師しか見当たらないため、一条殿に車を止めて、藤原公信を訪れるところである。この章段では、「あやしき法師」と「下衆」について、また、九四段⑥との相関性について考えさせられる。

まず、ここで登場する下衆は、法師と同格に見られている。法師の身分については一六八段で言及されており、「法師は、律師。内供。」と、僧正、僧都に次ぐ五位の身分や、御齋会の読師を務める内供が選ばれている^七。したがって、登場した法師がそのような身分であれば、下衆と同格に扱われることはないだろう。ここでは、そういった役職にも選ばれないような、「あやしき」と言われるべき法師であったと考えられる。そのような法師は、これまで否定的表現に多く登場した下衆と同じような存在であると、清少納言は考えていたのだろう。

次に、「卯の花を挿した車を誰かに見られたい」という欲求は、先ほど九四段⑥に登場した「人などに語りつべからむをがなと思ふ」を受けている。今回も九四段⑥と同じく、教養のある身分の高い人に出会うことができなかったので、清少納言は藤原公信の家にわざわざ訪れる。九四段⑥では、「風流心を解する下衆にでも会いたい」と受け身の姿勢であったが、この章段ではそれで終わりにならず、能動的に見てもらおうとする。転んでもただでは起きない清少納言の強かな性格が、前章段との比較で明らかになる。

⑧巻染、むら濃、くくり物など染めたる。人の子生みたるに、男女とく聞かまほし。よき人さらなり。えせ者、下衆の際だに

なほゆかし。除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりも、なほ聞かまほし。(一五三段)とくゆかしきもの(二八〇頁)

この章段は、「早く知りたいもの」として、人が子どもを産んだとき、男か女かどうかを挙げていいる。身分の高い者はもちろん、つまらない者や下衆もやはり興味深いとある。ここでの下衆は、清少納言に興味を示されている。その理由として、清少納言は、子供が好きであることが挙げられる。例えば、五七段では「ちごは、あやしき弓、しもとだちたる物などささげて遊びたる、いとうつくし。車などどめて、抱き入れて見まくほしくこそあれ。」と、子供を愛しく思っている描写を読み取ることができ^{七三}。また、一四五段の「うつくしきもの」では、瓜に書いた稚児の顔をはじめとした子供に関する内容が大半である^{七三}。したがって、子供については、身分の格差に関係のない平等な存在として扱っていたのではないか。そして、生まれた子供が男女であるかどうかは、宮中に仕出す前の九八一年に橘則光との間に則長を授かった^{七四}清少納言からしても、早く知りたいもの一つであったことだろう。そのため、子供については、下衆であろうが清少納言の興味の対象となり、否定的な表現からは除外されるのである。この時の下衆は、清少納言が特に興味をもっている場合の例えとして提示されていると考えられる。

⑨いつしかと待つに、御社の方より、赤衣うち着たる者どもなどの連れだちて来るを、「いかにぞ、事なりぬや」と言へば、

「まだ無期」などいらへ、御輿など持て帰る。かれに奉りておはしますらむもめでたく、け高く、いかでさる下衆などの近く候ふにかとぞおそろしき。(二〇六段)「見物は」三四四頁

「見物は」では、清少納言が実際に体験したものととして「臨時の祭、行幸、賀茂祭の帰りの行列、御賀茂詣で。」の四つを挙げており、御賀茂詣以外の三つは、それぞれ具体的にどこが良いか紹介されている。下衆は、「賀茂祭の帰りの行列」にて登場する。これは賀茂祭が終わって、齋院が上賀茂から紫野の御所へ帰る列のことである^{七五}。当時の齋院は、村上天皇の皇女である選子内親王であった^{七六}。その行列を待っていると、赤色の狩衣を着た者が登場したので、清少納言が行列は始まるのかと聞くと、まだだと返事をする。そして御輿を担いで齋院へ帰るのだが、なぜそのような下衆が仕えているのかと、恐ろしく思っている。ここでの赤色は、退紅色であり、下衆が用いる色である^{七七}。御輿に乗る人物は、六段に中宮定子^{七八}や一二三段に一条天皇^{七九}、二二一段に齋院が乗っている描写^{八〇}があった。御輿は皇族が使用するのである。そのような人物を担ぎ上げるのが退紅色の下衆では、確かに不釣り合いである。この後の描写では、公達や蔵人所の衆、殿上童など、高い身分が参列している描写がなされている。下衆が相対的に恐ろしく見えるほど、賀茂祭の帰りというものは華やかであったのだろう。

⑩きらきらしくよきなどをば、いとさしも押しひしがず。いと清げなれど、またひなび、あやしき下衆など絶えず呼び寄せ、出だしすゑなどしたるもあるぞかし。(二二一段)「よろづの事

よりも、わびしげなる車に」三五六頁)

先の章段では、賀茂祭の帰りに下衆が登場したという内容であったが、こちらも同様に、賀茂祭の帰りであり、再び下衆が登場する。清少納言が車を止めて見物しており、齋院が通るときはどの車も敬意を表して轅を下げている。齋院が通り過ぎると、みな一斉に轅を上げているのを「をかし」としている。止める隙間がないほど車で埋まっている、身分の高い人と、そのお供の車（よきところの車）が、以前から止まっている車をのけさせていることは「いとめでたけれ」としている。追い払われた車は牛を連れて空いた場所へ移動するのは「いとわびしげなれ」としている。立派に輝いて見える車にはそのようなことはされず、しかし見た目がよくても田舎じみた下衆を絶えず呼び寄せ、座らせている者もいるということである。末尾の訳ははっきりしておらず、「下衆を前に座らせて見物させる」という意味もあるようだ^八。また、勝保隆（一九九〇）は、清少納言や貴族は下衆を卑しんでいることから、座らせて見物させる意味はなく、貴族は下衆に、「よきところの御車」がいつ来るのか情報を主人へ「呼び寄せ」、周囲の様子を偵察させるために「出だし」、車を守るために周囲に「すゑ」たという訳をする^{八二}。確かに、下衆は良い扱いを受けておらず、貴族とともに見物するということはないだろう。そのため、本論では、勝保（一九九〇）の解釈に従いたい。

この章段では、車の見た目や人物を論じている。身分の高い車は、他の車を移動させるほどの権力を持っているが、車の見た目が良ければそのような扱いを受けないことがわかる。しかし、見た目

が良くても、連れているのが身分の低い者ばかりの車もある。そういった部分もしっかり見られており、車の外面をよくするのなら、それに乗る人物も相応でなければならぬと、清少納言は考えていたのではないか。下衆は、やはり下賤の者ゆえに、一目見てわかるような出で立ちをしていたのである。結局そのような身分は、祭を見物する余裕はなく、主人が快く見物できるようにあくせく働くだけである。前段と合わせて、下衆が賀茂祭の帰りという行事にそぐわない存在であることを暗示しているように思われる。

⑪よき人御ことはさらなり、下衆などのほどにも、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるはことわり、いかが思はざらむとおほゆ。ことなる事なきはまた、これをかなしと思ふらむは、親なればぞかしとあはれなり。親にも、君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたき事はあらし。 (二四九段「世の中になほ心憂きものは」三八〇頁)

この章段は、世の中でやはりとても嫌なものとして、「人にくまれむ事」を挙げている類聚的章段である。どこに「自分は人にくらしいと思われたい」と考える人がいるのか、けれどもどうしても仕え先や親、きょうだいのあいだでも愛される、愛されないといった違いが自然に表出されることを「いとわびしきや」と嘆いている描写がこの文章の前にある。引用した本文では、「身分が高い者はもちろんそうだが、身分が低い者でも、親がかわいがっている子は、注目されたり噂をされたりするような愛おしい子であると思っ

ている。その子が特に育てがいのある子どもであれば親がかわいがるのは道理にかなっており、どうしてかわいがらないでいるのかと思われる。一方そうでない場合でもかわいがっているのは、親だからであり、親の気持ちがいじみと感ぜられる。親にも、お仕えする方にも、親しき仲の人にも、人に良く思われることのようなすばらしいものはない。」といった内容である。

全体的に愛情についての論理が語られており、ここでの下衆は一五三段(⑧)と同じように、やはり清少納言が、特に主張したい意見の例示として使われていると考えられる。確かに、否定的な表現が使われることの多い下衆をあえて登場させることで、「普段下衆を嫌っている清少納言でも下衆を登場させるほどの内容」と、読者に興味をもたせることができる。下衆の例示も踏まえて、子供については、「身分の差は関係なく、子供は最低限でも親から愛される権利がある」と主張しているのではないか。清少納言の母親らしさを、一五三段(⑧)から読み取ることができたが、この章段でも読み取ることができる。

⑫(清少納言が)いととう起きて、「泣きて別れけむ顔に、心おとりこそすれ」と言ふを(定子が)聞かせたまひて、「げに雨降るけはひしつるぞかし。いかならむ」とて、(定子が)おどろかせたまふほどに、殿の御方より侍の者ども、下衆などあまた来て、花のもとに、ただ寄りに寄りて、引き倒し取りてみそかに行く。(二六〇段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」三九九頁)

この章段は、関白藤原道隆が、九九四年二月二日に積善寺で法会を行った際の話である。そこに季節外れの桜の木があり、夜に雨が降った翌朝見ると、ひどくしぼんでしまっていた。清少納言は「泣いて別れた時の顔に劣る気がする」と言い、中宮定子が「雨が降る気配がした。桜はどうなっているだろう」と目覚めたところ、関白の寝床の方向から侍や下衆が多く来て、桜の木をこっそりと引き倒して行く。この桜の木は、道隆が作らせたはりぼてであったので、雨が降って花びらが溶けてしまい、晴れの儀式に見栄えが悪くなるのを恐れて侍や下衆などの召使に頼んで回収させたのである。

下衆は、侍と一緒に登場している。侍は、貴人の家に使える従者であり、中宮、親王、摂関、大臣などの侍は、五位や六位に叙位された^{八三〇}侍は、地下よりは若干身分が高い存在であるといえる。位のある侍と、そうでない下衆が協働する場面は、作中においてもこの章段のみである。そのため、通常は別々に職掌が割り当てられていたと思われる。ここでは、桜の木を早く回収させようと、道隆がとにかく大勢の人を送ろうとした結果、侍と下衆といった、混交した身分が登場することになったのではないか。道隆の焦燥感を強調するために、あまたの下衆が存在しているのである。

以上が性別にかかわらない「下衆」が登場した場面である。同じ要領で、下衆男についても考察する。

⑬思へば、舟に乗りてありく人ばかりあさましう、ゆゆしきものこそなけれ。(略)物をいとおほく積み入れたれば、水際はただ一尺ばかりだになきに、下衆どもの、いささかおそろしと

も思はで走りありき、つゆ悪うもせば沈みやせむと思ふを、大きな松の木などの二、三尺にてまろなる、五つ六つほうほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。(二八六段「うちとくまじきもの」四四〇頁)

「うちとくまじきもの」とは、「気の許せそうにないもの」である。中心となっている事柄は「船の路」であり、この中に、運搬を生業としていた人足と呼ばれる下衆男が登場する。船に乗って移動する人こそ、不気味で恐ろしい者はないとしており、清少納言が船の移動を嫌っていたことがわかる。これについては「老夫棟世について任国撰津にくだつた時の経験や、また父元輔の肥後の守就任の時の経験も語られているかもしれない。」^{八四}とし、清少納言は実際に船の恐ろしさを体験したことがあるのだろう。物を多く積んだ船があると少しで傾きそうなほどなのに、下衆男たちが少しも怖いと思わず船上を歩きまわり、少し何かがあれば沈みそうなのに、大きな松の木の二、三尺もあるのを五つ六つ投げ入れるのは悪いことだとしている。人足にとつては日常茶飯事のこと、船旅にも慣れていながらこそそのような立ち回りができるが、そうでない人から見ると、とても恐ろしいように見える。下衆男が沈みそうな船を歩き回り、さらに木材をどかどか投げ入れる無神経さに対して、「いみじ」としているのだろう。下衆男でも、やはり否定的な表現が使われていることには変わりないが、この場合は、清少納言以外の人物から見ても、同じ意見を持つのではないだろうか。

⑭物聞きに夜より寒がりわななきをりける下衆男、いと物憂げ

に歩み来るを、見る者どもはえ問ひだにも問はず。外より来たる者などぞ、「殿は何にかならせたまひたる」など問ふに、いらへには、「何の前司にこそは」などぞ、かならずいらふる。(二三段「すさまじきもの」六一頁)

この章段では、「興ざめするもの」の一つに「除目に司得ぬ人の家」を挙げている。今年はず国司に任官すると聞き、さまざま人々が集い、饗宴をするのに、任官の詮議が終る夜明けまで報告をもらす者が来ないまま、上達部が帰ってしまう。吉報を聞こうと夜中から寒がつて待機していた下衆男が、ひどく物憂げに歩いてくるのを、見る者は何も言うことができない。よそ者が聞くと、「何々の前司ですよ（今年の任官はありませんでした）」と答える。結果を持ち帰ってくる下衆男が明るくない調子で帰ってくると、任官の吉報が訪れるようには思えないだろう。その時点で、主が「除目に司得ぬ人」と決定づけられてしまう。「今年こそは任官できる」と思っていた矢先の下衆男の所作が興ざめであったことは間違いない。また、ここで下衆男が男であったことは、七八段からその理由を探ることができる。七八段は、清少納言が齊信と仲が悪くなり、齊信が清少納言に歌をよこすときの伝達役として、主殿司の男が、雨のひどく降る中、清少納言と齊信の間を行ったり来たりする描写がある^{八五}。ここから、雨や寒い折などの、外の状態が悪い時に使いに出されるのは、男性であったと推察される。

ここまで、十二回登場した「下衆」と、二回登場した「下衆男」について考察した。まず、下衆についてだが、十二回の登場のう

ち、七回が類聚的章段であり、下衆について、その存在に言及されることが多かった。やはり否定的な表現が多く、清少納言が下衆嫌いだであることを垣間見ることができた。反対に、「とくゆかしきもの」のように、清少納言が興味を持っている場面も見受けられており、嫌っている部分は多いが、一部分には興味を示していることもあった。下衆男については⑬では、無鉄砲な姿には気を許せそうにないとし、⑭では興ざめにさせる人物としている。これも否定的な表現の一つとしてとらえてもよいだろう。では、下衆女も同じように登場するのか、はたまた違いがあるのか。清少納言が同性の下衆に対して、どのような感情を抱いていたのか第二節で読み解いていく。

第二節 下衆女

第一節では性別にかかわらず下衆と、下衆男についてそれぞれ述べた。本節では、八回登場した下衆女を取り上げる。また、第一節と第二節の結果を踏まえて、『枕草子』における下衆の存在意義について考察する。

⑮下衆の、紅の袴着たる。このころは、それのみぞある。

(四三段「にげなきもの」一〇二頁)

こちらは第一節の②にある文章の続きである。紅の袴とは、緋の袴であり、下級女官が着用していたが、ファッションとして世間に流行していたようだ^{八六}。紅の袴を下衆女が着用することで、女官になりきっていたのだろう。しかし、自分の身分を顧みずに、背伸びすることを清少納言は良しとしなかった。身分相応の暮らしをする

べきだと主張しているのではないか。紅の袴は、一五五段にもみられ、そこでは関白藤原道隆が没し、服喪であったところを中宮定子が大祓ということと太政官庁の朝所に移動する。時司には鐘楼に続く階段があり、二十人ほどの若い女房が誰も彼も薄鈍色の裳、唐衣、単襲、紅の袴を着て登っているのは、「いと天人などこそえ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。同じ若きなれど、おしあげたる人はえまじらで、うらやましげに見あげたるも、いとをかし」^{八七}と、特別な気持ちになっている。紅の袴は、女房にこそ似つかわしいのである。下衆が背伸びした服装をしてはいけない、身分相応の振る舞いをせよと訴えているのではないか。

⑯若くよろしき男の、下衆女の名呼びなれて言ひたるこそ、にくけれ。知りながらも、何とかや、片文字はおぼえて言ふはをかし。宮仕へ所の局に寄りて、夜などぞ、あしかるべけれど、主殿寮、さらぬただ所などは、侍などにある者を具して来ても、呼ばせよかし。てづから声もしるきに。はした者、童べなどは、されどよし。(五五段「若くよろしき男の」一二二頁)

この章段では、若くて身分の高い男性が、卑しい身分の女の名前をなれなれしく呼ぶことは、どうにも不快なものであると述べている。しかし、「何という名前だったかな」と、臆気に覚えているのは「をかし」であるという。宮中の局に、夜に人を遣わせて女を呼び出すのは悪いが、主殿司やそうでない普通の場所では、侍所にいる人を連れて女を呼ばせるのがよい。自分から呼ぶのでは、声が誰のものであるかはつきりわかるからである。取るに足りない者や、

子供は自分で呼んでもよい、という内容であり、下衆女の名は直接呼ばれるべきではないということである。「よろしき」とあるので、身分の高い者が、下衆の名前を呼ぶことは、はしたない行為だったのである。この後に登場する「はした者」や「童べ」は、そもそも身分や地位をつけ難い存在なので、そういった者が直接呼んでも問題はなかったものと思われる。下衆女は、貴族にとつて取るに足らない存在であるのだから、名前を覚える必要はない。清少納言の、貴族が持つべき意識を読み取ることのできる章段である。

⑰(明順が)「所につけては、かかる事をなむ見るべき」とて、
稲といふものを取り出でて、若き下衆どもの、きたなげならぬ、そのわたりの家のむすめなどひきもて来て、五、六人してこかせ、また見も知らぬくるべく物、二人して引かせて、歌うたはせなどするを、(清少納言が)めづらしくて笑ふ。(九五段「五月の御精進のほど」一八五頁)

第一節にて引用した九五段(⑦)には、下衆女も登場する。ホトトギスの鳴き声を聴きたい清少納言ら女房は、高階明順の田舎風の家を訪れて、ホトトギスの声を聴いている。そこに明順が、「田舎であれば、こういうのを見るべきです」と言い、稲というものを取り出して、見た目のこぎれいな若い下衆女たちや、その辺の家の娘を引き連れて、五、六人して稲をこかせて、また見知らぬくるくる廻る機具を二人で引かせて、歌を歌いなどするのが珍しくて笑う、とあった。ここは明順の家であるから、この下衆女たちは明順つきの召使なのだろう。否定的な表現が見受けられないのは、明順が、中

宮定子の母の父の三男、つまり大叔父であることへの配慮が挙げられる。また、ここでは「珍しくて笑う」と、面白がっている描写や、「見も知らぬくるべく物」を見ている描写が見受けられることから、純粹に下衆女の稲刈り見物を楽しんでいたのでないだろう。また、見知らぬくるくる廻る機具は、靱摺り臼であり、歌っていたのは和歌ではなく、臼を挽くときに歌う臼歌とされている^{八八}。この後二百九十段(⑳)は、下衆女が和歌を歌うことを憎んでいる内容であるため、白歌は、民謡など、庶民に歌われていた歌だったのである。この章段では、清少納言が特に記憶に残ったもの、珍しいと思ったもの一つとして、下衆女が存在している。

⑱六、七月の午未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけてゆるがし行く者。雨降らぬ日、張り筵したる車。いと寒さをり、暑きほどなどに、下衆女のなりあしきが、子負ひたる。老いたるかたゐ。小さき板屋の黒う、きたなげなるが、雨に濡れたる。(二一八段「わびしげに見ゆるもの」二二八頁)

「つらそうに見えるもの」としては、六七月の正午(日差しが強く照り付けている時間帯と思われる)に汚い車に貧相な牛をかけてよたよた行く者、雨の降らない日に雨よけの筵を張っている車、とても寒い時や暑い時に下衆女の身なりの悪いのが子供を背負っていること、年老いた物乞い、小さい板葺き屋根の黒く汚い家が、雨に濡れていることなどが挙げられている。張り筵の車以外は、おおかた「貧相」に焦点を当てられたものとなっていて、特徴である。下衆女の身なりが悪いということは、身分が低く、生活に行き詰っ

ている可能性があり、そのうえ酷暑極寒のなかで我が子を抱くという姿には、確かに心を打たれるだろう。ここであえて下衆を女性としたのは、男性と比べて官職や地位が低く生活力のない方が、より「つらいもの」に見えたからではないか。また、下衆女のほかに、汚い車や家の屋根などが「わびしげに見ゆる」のは、現代でもあまり変わらない価値観や感性であるといえる。清少納言の美的意識が、現在まで受け継がれているのである。

①⑨とみの物縫ふ糸。下衆女の髪。人のむすめの声。灯台。
(二二八段「短くてありぬべきもの」三五二頁)

この章段は、「短くあった方がよいもの」として、四つの事物しか書かれていない。そのため、非常に短い章段である。急な仕立物を縫う糸は短いのがいいというのは、早く縫い物をするためには、長い糸では引つかかったり、途中で切らなければならなかったりと、使い勝手が悪くなるからではないか。下衆女の髪が短いというのは、立ち働きに不便であり、また、髪が長いのは貴くて、下衆に相応しないという理由がある^{八九}。「人のむすめ」とは、未婚の女性のことである。「声が短いこと」については、『新編日本古典文学全集 枕草子』では口数が少ないことの意であるとされている^{九〇}。しかし、田中重太郎の『枕草子全注釈』では、長く引いた甘え声とされており^{九一}、解釈が諸本によって異なる。どちらにせよ、未婚女性の声は慎ましいことが理想のようだ。灯台とは、室内で灯火を置くのに用いる台である^{九二}。台の長さが短い方が、燭台の付近がよく見えるのである。いずれものを射た意見となっており、下衆女の髪

は、その仕事や身分からして、短くなければならない。身分の差が身なりに現れることが望ましいとしてしているのである。

②⑩下衆の家の女主。痴れたる者。それしもさかしうて、まことにさかしき人を教へなすかし。(二四一段「さかしきもの」三七四頁)

「小賢しいもの」を列挙しているこの章段では、下衆の家の女主人が挙げられた。これは「偉くもないのに偉いと思う人の一典型」^{九三}とし、自分が優れている存在であると勘違いしている人物像の例えとして下衆女が登場している。そのような女は馬鹿者であるが、それでも小賢しくて、本当に賢い人を教えるなどするのである、とあり、女主の行動は、本当に賢い人ならそのようなことはしないと皮肉にもなるのである。また、下衆に教養がないことを批判するという意味も込められているのだろう。清少納言は下衆の小賢しい行動にも目を光らせて、後世に書き伝えたのである。

②⑪をかしと思ふ歌を草子などに書いておきたるに、言ふかひなき下衆のうちうたひたるこそ、いと心憂けれ。(二九〇段「をかしと思ふ歌を」四四四頁)

この章段の本文は、引用した一文のみである。「面白い」と感じた歌を草紙に書いたのに、何も言うことのない下衆女が、その歌を気軽に歌ったことは、非常に不愉快である、といった内容であり、下衆女が歌を歌うことに対して、清少納言は強い不快感を覚えている

る。そもそも歌を歌うという習慣は、貴族が基礎教養として学んでいた儒学の教えに沿っており、貴族としての品性や容儀を整えるためにあった^{九四}。だから、無教養の下衆などには歌は似合わないということである。また、「心憂けれ」の理由に、清少納言が気に入った歌が下衆の好みと一致してしまい、自らの風流心やプライドを傷つけられたという意味もある^{九五}。同じ女であれども、身分差は確実にあり、下衆女と自らの格の違いを主張しているようにも思われる。

②よろしき男を、「下衆女などのほめて、「いみじうおはします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。また、ほむるままに言ひそこなひつるものは。(二九一段「よろしき男を、下衆女などのほめて」四四五頁)

こちらは②に続く章段である。身分の高い男を下衆女がほめて、「とても親しみがあるようにいらっしやいます」などと言うと、その男は軽蔑されてしまうに違いない。悪口を言われるのはかえってよい。下衆にほめられるのは、女であろうととてもよくない。また、ほめるうちに言いそくなってしまふのだから、ということでも、やはり下衆に対する嫌悪感を清少納言はあらわにしている。褒め言葉は、誰からも言われる者であってはいけない。この章段は、特に身分の低い者には褒められてはいけないと要約できる。「下衆女などには『よろしき男』のことなど理解できるはずはないのである。また一説には、下衆女と特別に親しい関係にあるかと疑われるの

で」^{九六}とあり、下衆が、先ほど二九〇段(②)に登場した下衆女と同じく、風流を知らない小賢しい存在であることから、悪口を言われるくらいがいいのである。知られていると、下衆に認知されるような感性であると認められ、高貴さと無縁になってしまうのである。風流は、庶民の理解し得ない世界で輝きを放つのである。あるいは、男をほめていると、男女の関係にあると思われるであろう可能性もあるので、下衆にほめられないようにする必要があると説いているのではないか。また、「よろしき男」以外にも、女でも褒められてはいけないとあり、確かに、作中には、下衆が中宮定子やその他女房など、女性をほめている場面は存在しない。反対に、清少納言が女性を称賛している場面は多くあるので、自らは、「貴族」としての自負があったのだろう。

そして最後の文には、「下衆はほめるつもりでも、かえって悪く言ってしまう」という意味がある。下衆の言葉足らずなところは、四段(①)の「下衆の言葉には、かならず文字あまりたり。」を踏まえて言及しているのだろう。相手をほめようとほめ言葉をつらつら並べるうちに、皮肉に聞こえるようなほめ言葉や悪口と取ることでできる言葉を口に出してしまう下衆の姿が容易に想像される。また、九四段(⑥)では、見苦しく装飾された車を、風流心を解する下衆に「見苦しい」といって拡散してほしいものだとあつたが、これはつまり、「ただの(風流心を解さない)下衆は車の装飾が見苦しいこともわからないほど無知である」という意味もあつたのではないか。清少納言は、基本的には、下衆が貴族と等しい感性を持ち合わせることを嫌っていたのである。

以上の考察より、『枕草子』における下衆女は、やはり下衆と変

わりなく、否定的な表現を用いられる存在であることが分かった。下衆女では、⑮、⑲より、身分をわきまえた身なりをすることや、⑳、㉑より、風流心を解さない無教養の人物像が多く挙げられており、清少納言が下衆女と自らを差別化するために、下衆女について多くを語ったのではないだろうか。清少納言自身は名高い歌人の娘であり、また中宮定子の女房である。さらに、作中で歌を詠む場面はいくつもある。そのため、下衆女よりも地位や教養が上であることを、暗に下衆女を貶めることで顕示しなかったのではないか。下衆男との違いは、性別の価値観について述べられている箇所や、貴族との身分格差について述べられている箇所があるところである。

ここまで下衆、下衆男、下衆女について考察したが、否定的な表現が多いという特徴はかねてより述べてきた次第である。地下と比べると、どうしても劣って見える存在であることは否めない。日記の章段でも、地下は「をかし」を使われる場面があったのに、下衆には一度も美的表現が使われることはなかった。そうであるならば、『枕草子』における下衆は、ただ悪口を言われるだけの哀れな存在ということが終わってしまう。しかし、ここまで下衆に対して否定的な態度をとられていることは、清少納言の生い立ちに関係があるようだ。山本淳子（二〇一七）は、

厳しい身分社会にあって、下級貴族にすらなかなか慣れない父を持ち、幼い頃は周防の田舎暮らしまで経験して、ただひたすら上級貴族の雅びに憧れていた。その憧れの世界を純化する余り、下衆を全否定したのだ。^{九七}

と述べている。下衆が否定されるのは、自身が下衆に近しい時期があり、それを思い出さなくなかったからだろうか。また、山本氏は、平安時代に後見をなくした女が転落人生を送ることに鑑みて、「貴人の女房であろうと、下衆と紙一重だったのだ。その時、両者を隔てるものはただ一つ、雅びと記憶だけである。」^{九八}という。そのため、自分は下衆ではない、下衆のような教養のなさや身分ではない、ということを訴えるために、あえて下衆を多く書き、否定的な表現を盛り込んだのではなからうか。しかし、清少納言は、宮中を去った後の人生が定かでなく、説話中では、流浪・落魄の主人公であり、六〇歳程度で死去したとされている^{九九}。宮中に出仕していたころと打って変わって落ちぶれた生活をしてきた可能性を考えると、下衆を否定し、逃げ続けた結果、自身が下衆になるというなるとも皮肉な生涯に終わってしまったことになる。しかしながら、平安文学を代表する『枕草子』を創り上げ、「春はあけぼの」にはじまる各所にちりばめられた独自の表現や歌の素養、定子の下に華やかな宮廷生活を送った清少納言の本質が下衆であるとは、到底認められるものではない。清少納言は、下衆とは確かに一線を画し、日本文学史においてその名を刻み付ける存在であったことを、自らの作品によって証明したのである。

おわりに

ここまで、全三章にわたって、『枕草子』における地下と下衆の表現と、その存在意義について論じた。全体的な特徴として、地下の特徴は、隨身と主殿司の例を見る限り、「をかし」が使われ、「理

想の男性・女性像」として挙げられるなど、多くの章段にて、肯定的にとらえられていることがわかった。理由は、主人の貴族とともに、称賛の対象となるからである。そこから、『枕草子』における地下の存在意義は、貴族の引き立て役であることと結論付ける。

しかし下衆については、清少納言がとにかく否定したがっていることがわかった。「似つかわしくないもの」、「見苦しいもの」など、多くの否定的表現を与えられた下衆は、赤子の性別を知りたいといった例外を除いては、作中で良い扱いは受けていない。性別で見ても、下衆男については、その大雑把さや興ざめな行動を批判し、下衆女については、行動以外にも、身なりのきまりや、風流さをわかつているつもりではないといけない、身分の高い者に名前を呼ばれるべきではないといった、下衆らしく存在することが理想であるとの主張を読み取ることができた。下衆女については、清少納言が女房であったからこそ、女性について多く書かれていたのだろう。そして、このように下衆を批判したのは、宮中に勤める前の経歴や、女房になっても落ちぶれた生活をした女性もいた前例から、下衆という存在から何としても逃れようとしていたという背景があったのかもしれない。

以上より、地下は肯定的に、下衆は否定的に捉えられており、それぞれ「中宮定子時代の華やかさ」、「自らが下衆のような身分の低い者でないこと」を表すために、地下と下衆といった身分の低い者が『枕草子』に登場したと結論付ける。そこには、お互いの性質は違えども、本文を時におかしく、時に共感を狙い、時に優雅に、色鮮やかに染め上げるといった役割がそれぞれ与えられている。こういった脇役の役割は、『枕草子』を、当時の歴史・文化を知る一助

となし、中宮定子時代が清少納言にとって華やかで楽しい出仕生活の時期であったことを顕示する。また、彼らの存在こそ、『枕草子』を平安時代の代表作品として、今もなお、次世代に受け継がれていく不滅の作品へと昇華させたのではないだろうか。

注

- 一 和田英松『官職要解』（講談社、一九八三年十一月）四十頁
- 二 和田英松『官職要解』（講談社、一九八三年十一月）三十二頁
- 三 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年三月）「令外官」「員外官」「権官」
- 四 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一〇一頁
- 五 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一一三頁
- 六 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）九一頁
- 七 和田英松『官職要解』（講談社、一九八三年十一月）二七四頁
- 八 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年三月）「殿上人」
- 九 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一〇八頁
- 一〇 繁田信一『庶民たちの平安京』（角川選書、二〇〇八年五月）百二十六頁
- 一一 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一〇八頁
- 一二 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年三月）「地下」

- 一三 倉本一宏『平安京の下級官人』（講談社現代新書、二〇二三年一月）三十五頁
- 一四 繁田信一『源氏物語を楽しむための王朝貴族入門』（吉川弘文館、二〇二三年十月）一八二頁
- 一五 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）十一頁
- 一六 神野清一『卑賤観の系譜』（吉川弘文館、一九九七年）一三頁
- 一七 白土ルリ子『紫式部日記』にあらわれた紫式部の性格と心理』（『国文研究』熊本女子大学国文談話会、一九六一年三月）二二頁
- 一八 竹内正彦「門前の隨身―『源氏物語』における夕顔物語の始発をめぐって―」（『玉藻』四八巻、フェリス女学院大学国文学会、二〇一四年三月）六九頁
- 一九 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）百二十頁
- 二〇 中野幸一『新編日本古典文学全集 うつほ物語』（一九九九年六月）三五九頁
- 二一 阿部秋生・秋山虔・今井源衛『新編日本古典文学全集 源氏物語 ⑥』（一九九五年一月）「手習」三三二、三三三頁「下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、『僧都、今日下りさせたまふべし』、『などにはかには』と問ふなれば、『一品の宮の御物の怪になやませたまひける、山の座主御修法仕まつらせたまへど、なほ僧都参りたまはでは験なしとて、昨日二たびなん召しはべりし。右大臣殿の四位少将、昨夜夜更けてなん登りおはしまして、後の宮の御文などはべりければ下りさせたまふなり』など、いとほやかに言ひなす。」
- 二二 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一二〇頁
- 二三 和田英松『官職要解』（講談社、一九八三年十一月）一三六頁
- 二四 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年三月）「隨身」
- 二五 『日本大百科全書』（小学館、二〇〇一年四月）「隨身」
- 二六 二四に同じ。
- 二七 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一〇九頁
- 二八 秋山虔『王朝語辞典』（東京大学出版会、二〇〇〇年）二二〇頁
- 二九 田中重太郎『枕冊子全注釈 一』（角川書店、一九七二年十二月）二八八頁
- 三〇 『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇〇年一月）「壺胡籙」
- 三一 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）三四〇頁
- 三二 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二二八頁
- 三三 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）二六六頁
- 三四 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九六三年二月）二七九頁
- 三五 『枕草子 中』一二二頁
- 三六 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二二三頁
- 三七 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一年十一月）一二〇頁
- 三八 服藤早苗『平安朝 女性のライフサイクル』（吉川弘文館、一九九八年）一三四頁
- 三九 高島めぐみ『紫式部日記』に見る女房の服装と官位について』（『和洋女子大学紀要 家政系編』三八号、和洋女子大学家政学部、一九九八年三月）一五九頁
- 四〇 日向一雅『平安文学作品に現れた宮内省の諸寮―大炊寮・主殿寮・

- 典葉寮・掃部寮―(日向一雅『平安文学と隣接諸学4 王朝文学と官職・位階』竹林舎、二〇〇八年) 五八六頁
- 四一 『角川古語大辞典』(角川書店、一九八二年六月)「とのもりのつかさ」四〇に同じ。
- 四二 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』(笠間書院、二〇一一年十一月) 七五七頁
- 四三 田中重太郎『枕冊子全注釈 一』(角川書店、一九七二年十二月) 三九頁
- 四五 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 二七頁「命婦以上の上級の女官をニヨクワンと呼ぶのに対し、下級のをニヨククワンとよみ慣わすという。」
- 四六 田中重太郎『枕冊子全注釈 一』(角川書店、一九七二年十二月) 四二七頁
- 四七 田中重太郎『枕冊子全注釈 一』(角川書店、一九七二年十二月) 四五〇頁
- 四八 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 二二一頁
- 四九 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』(笠間書院、二〇一一年十一月) 一八三頁
- 五〇 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 一七四頁
- 五一 小町谷照彦・倉田実『王朝文学文化歴史大事典』(笠間書院、二〇一一年十一月) 二八七頁
- 五二 田中重太郎『枕冊子全注釈 二』(角川書店、一九七二年十二月) 二三八頁
- 五三 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 三二頁
- 五四 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 九〇頁
- 五五 田中重太郎『枕冊子全注釈 一』(角川書店、一九七二年十二月) 六一頁
- 五六 東大隆「『下衆の詞には、かならず文字あまりたり』考」(『別府大学国語国文学』二八巻、一九八六年十二月) 二〇、二二頁
- 五七 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 三二四頁「何事を言ひても、『その事させんとす』『言はんとす』『何とせんとす』と言ふ」と「文字を失ひて、ただ『言はずる』『里へ出でんずる』など言へば、やがていとわろし。」
- 五八 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 三〇八頁「ゐざりかくるるやおそきと、上げ散らしたるに、雪降りにけり。登華殿の御前は立部近くてせばし。雪、いとをかし。」
- 五九 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 三七〇頁「降るものは、雪。霰。霰は、にくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。雪は、檜皮茸、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。」
- 六〇 『角川古語大辞典』(角川書店、一九八二年六月)「檜皮茸」
- 六一 繁田信一『庶民たちの平安京』(角川選書、二〇〇八年五月) 一四七頁
- 六二 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一『新編日本古典文学全集 今昔物語集③』(二〇〇一年六月) 四六九頁
- 六三 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』(一九九七年十一月) 一五一頁
- 六四 『日本国語大辞典』(小学館、二〇〇〇年一月)「しきの御曹司」
- 六五 三田村雅子『枕草子』『職の御曹司におはします頃』の性格」(『国文

- 学研究』七〇巻、早稲田大学国文学会、二〇一四年三月）三六頁
- 六六 田中重太郎『枕冊子全注釈 二』（角川書店、一九七二年十二月）二七五頁
- 六七 繁田信一『庶民たちの平安京』（角川選書、二〇〇八年五月）一〇頁
- 六八 繁田信一『庶民たちの平安京』（角川選書、二〇〇八年五月）二二頁
- 六九 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一八三頁「くちをしきもの 五節、御仏名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。節会などに、さるべき御物忌のあたりたる。いとなみ、いつしかと待つ事の、さはりあり、にはかにとまりぬる。遊びをもし、見すべき事ありて、呼びにやりたる人の来ぬ、いとくちをし。」
- 七〇 『日本国語大辞典』（小学館、二〇〇〇年一月）「好き好きし」
- 七一 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二九七頁
- 七二 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一一三頁
- 七三 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二七一頁
- 七四 『日本大百科全書』（小学館、二〇〇一年四月）「清少納言」
- 七五 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九六三年二月）四二八頁
- 七六 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一五八頁
- 七七 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九六三年二月）四二九頁
- 七八 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）三三頁「大進生昌が家に、宮の出でさせたまふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせたまふ。」
- 七九 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二三三頁「八幡の行幸の、かへらせたまふに、女院の御棧敷のあなたに御輿とどめて、御消息申させたまふ。」
- 八〇 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）三五五頁「御輿のわたらせたまへば、轅どもある限りうちおろして、過ぎさせたまひぬれば、まどひあぐるもをかし。」
- 八一 田中重太郎『枕冊子全注釈 四』（角川書店、一九七二年十二月）一六四頁
- 八二 勝保隆「枕草子二三七段の解釈について―『つきづきしの（美）意識』を通して―」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』四〇巻、一九九〇年三月）二十一頁
- 八三 『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年六月）「侍」
- 八四 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九六三年二月）五六二頁
- 八五 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一三七頁「今晚（清少納言を）あしともよしとも定めきりてやみなむかし」とて、みな言ひ合はせたりし事を、『ただ今は見るまじ』とて入りぬ」と、主殿司が言ひしかば、また追ひ返して、『ただ、手をとらへて、東西させせず乞ひ取りて、持て来ずは、文を返し取れ』といましめて、さばかり降る雨のさかりにやりたるに（略）」
- 八六 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一〇一頁
- 八七 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）二八四頁
- 八八 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）一八六頁
- 八九 田中重太郎『枕冊子全注釈 四』（角川書店、一九七二年十二月）一四一頁

- 九〇 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）三五二頁
- 九一 田中重太郎『枕冊子全注釈 四』（角川書店、一九七二年十二月）一四二頁
- 九二 『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年六月）「とうだい」
- 九三 渡辺実『新 日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店、一九九一年一月）二八九頁
- 九四 井上幸治『平安貴族の仕事と昇進―どこまで出世できるのか―』（吉川弘文館、二〇一三年五月）一八七頁
- 九五 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）四四四頁
- 九六 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（一九九七年十一月）四四五頁
- 九七 山本淳子『枕草子のたくらみ―「春はあけぼの」に秘められた思い―』（朝日新聞社、二〇一七年四月）二二四頁
- 九八 山本淳子『枕草子のたくらみ―「春はあけぼの」に秘められた思い―』（朝日新聞社、二〇一七年四月）二二八頁
- 九九 『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年三月）「清少納言」